

KOSOVO REGION

2001/8/25~2001/9/11

# BUNKYO VOLUNTEERS IN KOSOVO



VEHICULAR REPUBLIC OF  
MACEDONIA



# 地雷研修とUNHCR訪問



実際の地雷除去現場



UNHCR関係者とセルビア人民住区視察



信管を抜いた地雷を前に研修を受ける



UNHCR事務所にて



# マリシェボ高校でのボランティア活動

## 壁画



壁画作成の様子



1階完成図



2階完成図



3階完成図





花壇作業風景



プランター完成図

# 花壇

階段下の花壇完成図





# SRK (School Rehabilitation in Kosovo)



3日間作業したマリシェボ高校の外観



ADRA JAPANが復興事業を行う学校を視察

作業終了後行われたUNDPの会見。多くのマスコミ、国連関係者が招かれた。手前はUNDP ADRA JAPAN関係者



日本からの贈り物



お別れ会の様子



# ミトロビツァとノンダブルカ小学校



中央のイバル川をはさみ  
手前がセルビア人居住区、  
奥がアルバニア人居住区

ミトロビツァの橋



ノンダブルカの学校にて、先生、  
生徒たちの名前を習字で書く



橋の上の様子、戦車の銃口は常に水平に保たれている





# ラチャック村



45人が虐殺されたラチャック村の集団墓地



遺体を待つ墓



ラチャック村で子供たちと



千羽鶴を平和の願いをこめてラチャックの小学校へわたす。



NGO組織 ADRA JAPAN が支援しているベシアナちゃん。紛争によって顔にやけどをおった。何度か来日し、病院で治療を受けている。



# 日常生活



キッチンの様子。この日は、アルバニア人の  
の大家さんが料理を作ってくれた



移動中の様子。この車でコンボ各地を回った

ストレス・環境の変化・疲労…  
体調を崩すメンバーも出た



停電中の様子。ろうそくの明かりを頼りに作業を行う







“コンボ旅立ちの朝”  
～アドラハウスの前にて～

“プリスティナ空港でお別れ”  
マリシェボ高校の生徒が見送りに来てくれた





# 目 次

1.	若者が明日のドアをたたく、聞こえますか 国際学部教授 中 村 恭 一	3
2.	コソボ・ボランティア・プログラムの参加者、実施期間	5
3.	活動スケジュール	6
4.	コソボの歴史	7
5.	コソボの位置(地図)	8
6.	新聞記事	9
7.	UNHCR ジラネ事務所訪問と地雷研修 国際学部 2 年 渡久山純子	12
8.	SRKプロジェクトの視察 国際学部 3 年 東 健一	17
9.	マリシェボ高校での活動(壁画班) 国際学部 3 年 藤井博之	20
10.	マリシェボ高校での活動(花壇班) 国際学部 3 年 小澤麻子	22
11.	WORK SHOP 1 国際学部 3 年 中澤直子	27
12.	WORK SHOP 2 国際学部 3 年 野村朋代	30
13.	WORK SHOP 3 国際学部 3 年 伊丹知子	33



14.	ラチャック村訪問		37
	国際学部 4 年	松葉温子	
15.	ミトロビツツァとノンダブルカ小学校		41
	国際学部 2 年	友田幹久	
16.	日本での活動と共同生活		44
	国際学部 3 年	河明子	
17.	文教大学ボランティアをコソボに迎えて		47
	アドラジャパン	渡部 真由美	



## 若者が明日のドアをたたき、聞こえますか

文教大学国際学部教授

中 村 恭 一

国連安保理決議1244でコソボ紛争が終結し、国連コソボ暫定統治機構（UNMIK）が設置されてまもなく、私はニューヨークからコソボに赴任した。1999年8月のことである。

マケドニアの首都スコピエから国連が仕立てたバスでコソボに入ってもなく、まず私を驚かせたのは、紛争の傷跡ではなく、平和そのものの牧歌的な田園風景だった。なだらかな緑の丘が織物のひだのようにゆったりと幾重にも延び、その間を草原が埋め尽くす。もし牛を追う農民の姿でもあれば、恐らく私は目的地を間違えたのだと不安にすんなっただろう。

だが片側1車線、中央分離線すらない狭い道路をバスに揺られて3時間近く、州都プリステynaに着いて、国連職員臨時宿泊所となっていた元セルビア軍将校宿舎の簡易ホテルに着くと、紛争直後の町であることが直ちに実感できた。日が暮れたというのに、ホテルの6階の窓から見る町には明かりらしいものは何もない。バスルームの水は出ず、代わりに水の入ったコカコーラの2リットルビンが数本置かれている。まもなく自家発電機が動き出した。だがホテル内は照明されたものの、エレベーターは不通である。美しい自然の姿に見とれた昼間とは打って変わり、私はまさに紛争地で旅装を解くことになった。

それから15カ月。私は、国際社会の救援復興活動とコソボ史上初めて行われるべき選挙による民主社会の建設のためのコソボ住民に対する広報啓蒙活動の責任者として、さまざまな国籍の元ジャーナリストらから成る広報チームを率いてコソボ中を走り回った。夜間外出禁止令の敷かれた真っ暗闇の深夜、ひとり車で地方から州都に戻るのはしばしばだった。凍てついた道路で、チェーンをはいた四輪駆動車をスリップさせて肝を冷やしたことも何度かあった。コソボの冬は氷点下20度以下になることも珍しくない高原性内陸気候である。しかし80年代に電力による地域暖房化という近代化があだになって、停電中は首都と言えども私たちのアパートや下宿を含めて暖房がない。コソボの冬の厳しい生活は、国連のさまざまな平和維持活動や紛争後活動の中でも最悪の条件と言われた。

そのような状況の中でも、ベルナール・クッシュネル国連事務総長特別代表は、コソボの民族間融和と再建のために奔走した。私はしばしば彼に同行して、タウンミーティングや地元有力者との会談のためにコソボ各地を訪れたが、30年前に国境なき医師団を創設したこのフランス人医師は、アルバニア系であると否とを問わず、コソボ住民の心を見事につかみ、2000年10月末にはコソボ最初の民主的な選挙を成功させた。ニューヨークの国連本部にいる国際官僚には必ずしも評判は芳しくなかったクッシュネル氏だが、紛争後のコソボ再建に果たした彼の役割は実に大きなものだったというのが、常にそばで見ている私の実感である。

この強力な指導者に加えて、私が強い感銘を受けたのは、世界中から集まったNGOやボランティアたちの活動である。世界に名だたる大NGOは、その組織力、行動力、資金力に物言わせて、各地でコソボ復興に大きな力を発揮した。それらの大NGOに伍して、日本のいくつかのNGOもまた、着実に守備範囲を守り、厳しい冬を目前にしたコソボ住民の越冬作戦やその他の救援活動に貴重な役割を果たした。日本で集めたセーターを持ってきて、住民たちに配って回る青年た



ちもいた。彼らのある者は休職をし、ある者は退職覚悟でコソボにやって来ているのを知ったとき、彼らが日本のあるべき明日の姿を求めて一生懸命ドアをたたいているのを私は知った。

年が明けて、私は17年間の国連生活に終止符を打ち、春が来て大学の教師になった。コソボで出会った青年たちの意気とエネルギーをぜひ私の学生たちと分かち合いたいと密かに願っていた。

学生たちの顔を初めて見たとき、私の思いは瞬時にして大きな確信になった。『この若者たちは、コソボで出会った青年たちに劣ることなく、私と思いを共にしてくれるに違いない』。

私は直ちにコソボにおける学生ボランティア活動の可能性を探った。幸いにコソボでの勤務中に知り合った NGO で、私の考えを支持してくれる NGO があった。アドラジャパンである。国際 NGO としては実績十分のアドラ・インタナショナルの日本支部である。塚本俊也・支部長やそのスタッフ、それに何よりもコソボでボランティア学生を引き受けてくれるコソボ駐在代表の渡部真由美さんらの全面的な協力がなかったら、私の思いも中空を浮遊する幻想に終わっただろう。東京事務局での全面的支援を担ってくれた橋本笙子さんも含めたアドラジャパンの皆さん、ありがとう。

私がコソボでのボランティア活動の計画を明かすと、多くの学生たちはたちまち参加の希望を表明した。若者たちは新しい可能性を試すべく、とっくに準備が出来ていたのだ。

私は、この事実をすべての関係者に認識してもらいたいと願っている。関係者とは、大学関係者や学生の家族にとどまらない。政府も地方自治体も企業も、日本というこの私たち共有の社会の将来と国際的な信頼を若者たちに託さねばならないすべての人々である。

ここにお届けするのは、文教大学学生によるコソボ・ボランティア活動の報告である。文章はまだ学生のそれではあるが、その奥に潜む彼らの熱い思いはきっと感じ取ってもらえると思う。そして彼らの思いの向こうには、彼らの、そしてもっと広く日本の若者たちの力を必要としている人々がいることも、知ってもらえることと思う。



## コソボ・ボランティア・プログラムの参加者

文教大学国際学部      4年   松葉   温子

3年   東   健一

3年   伊丹   知子

3年   小澤   麻子

3年   河   明子

3年   中澤   直子

3年   野村   朋代

3年   藤井   博之

2年   渡久山純子

2年   友田   幹久

日本大学                2年   山口   貴子

国際基督教大学        4年   長井   喬充(アドラ・インターン)

指導   文教大学国際学部教授   中村   恭一

企画・協力   ADRA Japan

## 実施期間

2001年8月25日～9月11日



## 活動スケジュール 2001.8.25～9.11

8月25日		ADRA Japan 事務所集合
26日	国内研修 (ADRA Japan 事務所)	
27日	成田出発	ウィーン(Vienna)到着
28日	プリスティナ(Pristina)到着	Welcome Party
29日	Training Session	
30日	Workshop 1	地雷研修、ラチャック(Racak)訪問
31日	SRK 学校建設現場視察	
9月1日	UNHCR(Gjilane)訪問	Kosovo Trip (Prizren)
2日	マリシェボ高校 ボランティア活動準備	
3日	マリシェボ高校 ボランティア活動 (壁画制作・花壇づくり)	
4日	マリシェボ高校 ボランティア活動 (壁画制作・花壇づくり)	
5日	マリシェボ高校 ボランティア活動 (壁画制作・花壇づくり)	
6日	Workshop 2	ノンダブルカ関係者と交流
7日	ミトロビツァ(Mitrovica), ノンダブルカ小学校訪問	
8日	Kosovo Trip (Skenderaj, Istok, Peja)	
9日	Work Shop 3	
10日	反省会	プリスティナ自由行動 Farewell Party
11日	掃除、出発準備	プリスティナ出発



## コソボの歴史

### 第2次世界大戦前

- 12世紀 コソボは中世セルビア王国の中心地、セルビア正教会の発祥の地
- 14世紀 コソボ・ポリエでの「コソボの戦い」でセルビア共和国がオスマン・トルコに敗戦。以後、多くのアルバニア人が移住
- 1912～13年 2度のバルカン戦争において、オスマン・トルコに勝利したセルビアが再びコソボを取得。コソボはセルビア共和国の自治州としての地位を付与された

### 第2次世界大戦後

コソボはユーゴスラビア連邦セルビア共和国の自治州となった。(独自の憲法、議会、行政府、司法機関を持つ)



- 1968年 セルビア当局への不満から暴動発生
- 1981年 アルバニア系住民の暴動発生
- 1989年 セルビア系住民の支持によりセルビア当局がアルバニア系住民に対して弾圧政策
- 1990年 アルバニア系住民が「コソボ共和国」樹立を宣言  
スロボダン・ミロシェビッチがセルビア共和国の大統領に当選し、自治州の議会と行政の機能を停止し、軍と治安部隊による弾圧を行う
- 1992年 アルバニア系住民による「コソボ共和国」選挙の実施  
この選挙で大統領に当選したイブラヒム・ルゴバはセルビア当局と交渉による自治権の回復を目指した
- 1996年 K L A(コソボ解放軍)はコソボの独立を武力で実現しようと武力闘争を始める。以後、K L Aとセルビア治安部隊との間に武力衝突が頻繁に起こり、ユーゴ軍も介入。国際社会の外交努力にもかかわらずユーゴ政府は和平案を受け入れなかった

### 1999年

- 3月24日 コソボにおける人道的惨事が発生する可能性が高まったので、NATO(北大西洋条約機構)軍による空爆開始
- 6月10日 ユーゴ政府が撤退し、NATOは空爆を停止  
国連安保理が1244決議を採択
- 6月20日 ユーゴ軍・治安部隊の撤退完了  
国連はUNMIK(国連コソボ暫定統治機構)を設立

現在、国連安保理決議1244に基づき、文民部門を担当するUNMIKと軍事部門を担当するKFOR(国際部隊：NATOが主力)の下で和平履行が進められている。



コンボの位置 (旧ユーゴスラビアとコンボの地図)



Kosovo



The Former Yugoslavia



# コソボ・ボランティア関連記事 1

23

神奈川

13版

2001年(平成13年)8月7日

火曜日

県民

日

新聞

関

第3種郵便物認可

茅ヶ崎・文教大国際学部の10人



コソボでの活動について話し合う参加学生たち。茅ヶ崎市の文教大学で

## コソボへの旅 自分を試す夏

民族紛争の傷跡が残るユーゴスラビアのコソボ自治州に今月末、茅ヶ崎市にある文教大国際学部の学生10人が入る。国際的なNGO(非政府組織)による復興援助のボランティア活動に2週間ほど参加する。破壊された学校の修復事業を手伝い、虐殺のあった村を訪ねる。学生たちは「紛争地の現実を自分の目で見て、何ができるかを考えたい」と言う。

コソボ入りするのは、4年生1人、3年生7人、2年生2人。男子が3人で、女子が7人。昨秋まで国連のコソボ広報室長として現地にいた中村恭一さん(58)が、今年4月に文教大教授になったのがきっかけ。中村さんは「国際紛争の現実には自分ではつかかわるのか。それを考えたい」と大切に語ってきた。「バイト」遊びに明け暮れていたと笑う3年の東健一さん

### 復興援助に参加「紛争の現実 確かめたい」

は、中村さんの話に心を動かされた。4月に参加を決めてからは、28万円の参加費を稼ぐために深夜のアルバイトも始めた。コソボでは毎日1通は手紙を書けと勧めた。「紛争は遠い場所の出来事ではない。オレのような普通の20歳でもかわつていける」。そんな気持ちを友人に伝えたいと思っている。

3年の藤井博之さんは去年の夏、メキシコで植林ボランティアに参加した。語学が苦手なのに6つの国の学生たちとキャンプ生活を送った。その時、「ふれあうことが、現地へ行くことの大切さを実感できた」という。

2年の渡久山純子さんは沖縄出身だ。幼いころから戦争を意識していた。6月23日の慰霊の日には黙とうを欠かさない。「沖縄でも戦争のなまなましい傷跡はほとんど残っていない。コソボも、傷跡を見るなら今しかない」と参加を決めた。

リーダーで4年の松葉温子さんは養護施設でボランティアを続けている。「悲しんでいる子がいることがすごく悲しい。何が起ったのか、どういう状態なのかをこの目で見たいし、知りたいから行くんです」。

10人は、学内で呼びかけて集めた文房具類のほか、近くの小出小学校の子が描いた絵も届ける。中村さんとともに今年27日に出発し、ウィーンを経由してコソボに入る。来月11日にウィーンで現地解散。その後はそれぞれに、「自分を試す旅」を続けるという。



## 復興支援活動 虐殺の村訪ね千羽づる

## コソボ 紛争の悲しみ深く

## 文教大国際学部生 体験報告



報告会の終わりに教壇に並んだ10人の学生たち

「紛争地の現実を自分の目で見て考えたい」とこの夏、紛争の傷跡が残るユーゴスラビアのコソボ自治州でボランティヤ活動を体験した文教大国際学部(茅ヶ崎市)の学生10人による報告会が20日、同大であった。学生や教授のほか、学生らを応援した父母らも出席し

た。4年生1人、3年生7人、2年生2人が8月27日から9月11日まで、国際的な非政府組織(NGO)のADRA(アドラ)による復興支援活動やワークショップに参加した。報告会では、現地の様子が写真やビデオで映し

出され、学生それぞれが感じ、考えたことを語った。活動の中心は学校復興事業で、真新しい壁に壁画を描いたり、土を探し、花を探して花壇を作ったりした。絵の具も花も種類は少なく、NGO活動を続ける人から「そこにある物を使ってベストを尽くすこと」を教わったという。

虐殺のあったラチャック村も訪ねた。99年1月、セルビア軍に襲われ、アルバニア系の村人四十数人が殺されたとされる。墓地を訪ね、千羽づるを贈った。4年生の松葉温子さん(21)は「肌で感じた紛争の痛み、悲しみ、憎しみは一生忘れられない」と話した。

州都プリシュティナの北約30キロのミトロビッツアへも行った。紛争後、北のセルビアと南のアルバニアに分離されてしまった。スクリーンには街の中央の橋にある検問所も映し出された。

2年生の友田幹久さん(19)は「活気のない街から、殺気だった空気を感

じた」と語った。友田さんは、母親を目の前で亡くした少女たちが抱える深刻なトラウマとその精神的ケアについても報告した。

滞在中は1軒の家で共同生活した。時折停電があり、ろうそくのもので千羽づるを折ったり、日記を書いたりした。

最後に、3年生の東健一さん(22)が「自分の目で見ることで、自分の耳で聴くことで、現地で感じることの大きさを実感した」と語った。報告書も近くできる。



## コソボ・ボランティア関連記事 3

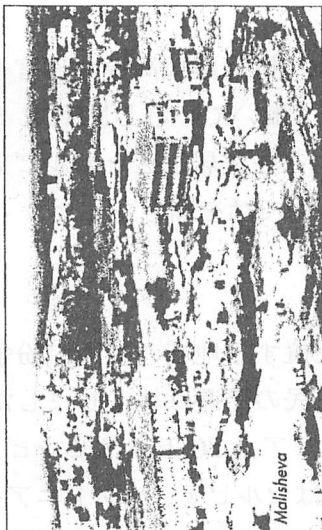
マリシェボ高校でのボランティア活動が地元の新聞で紹介された

### KOSOVA

PËRFAQËSUESIT E UNDP-SË DHE TË "ADRA" JAPONEZE, PREMTUAN INVESTIME TË SËRISHME NË MALISHEVË

## LACH FERGUSON: VAZHDONI TË MËSONI, TË PUNONI DHE TA DUANI NJËRI-TJETRIN PËR TA PËRPARUAR VENDIN TUAJ

Delegacioni i UNDP-së dhe i Shoqatës qeveritare japoneze "Adra" mori pjesë në përfundimin e punimeve dhe kompletimin me inventarë të aneksit të Gjinnazit "A. Frashëri" në Malishevë.



Malisheva

Malishevë, 6 shtator

Në ambientet e Gjinnazit "Abdyl Frashëri" të Malishevës, pos personelit asensor dhe nxënësve të kësaj vure të mesme shkollore, ishin të pranishëm edhe përfaqësues të administratës së UNMIK-ut e të strukturave udhëheqëse të KK të Malishevës, ushtarë dhe ushtarakë gjermanë të KFOR-it, si dhe nxënës e studentë nga Japonia. Kryesuesi i delegacionit të UNDP-së - z. Lach Patrick Ferguson, si zyrar i lartë i këtij programi, gjatë qëndrimit të tij në Malishevë, tha se ndihet i kënaqur që gjendet përkatës shkollore dhe mësuesit në tërësi të tyre shpirtërisht dhe, po ashtu ka kënaqësinë edhe për rezultatet e angazhimeve të Shoqatës qeveritare japoneze "Adra", e cila tash e sa kohë po implementon programin për rindërtim të OKB-së në vlerë prej rreth 6 milionë markash, që të gjitha për rindërtimin e ardhmësisë së shkollave, përkatësisht të pesë shkollave të reja. Delegacioni i UNDP që e kryesonte, z. Lach, si dhe përfaqësues të Shoqatës japoneze "Adra", në Malishevë kishin ardhur të marrin pjesë në përfundimet e punimeve në merrëntimin dhe kompletimin me inventarë të aneksit të Gjinnazit dhe që të ndajnë gëzimin bashkërisht me shkolllarët e kësaj komune. "Falë investimeve të Shoqatës japoneze "Adra" në Gjinnazit "Abdyl Frashëri", shtjell në fillim të vitit shkolror, janë krijuar kushte shumë të mira për përfshirjen

Lach Patrick Ferguson, gjatë një konference me gazetarë lokalë dhe të tjerë të reduktive të shumta nga Kosova, tha se për mëtejshin program, në Malishevë do të fillojë së ndërtuari edhe një shkollë e re, ndërsa do të angazhohen seriozisht për përfundimin e Palestrës së Sporteve, për të cilën, siç thanë do të investohen rreth 500 mijë dollarë amerikanë, përfitim dhe sigurimin e pajisjeve të nevojshme. Këtë ua kemi bërë shkolllarëve dhe popullit shqiptar në Malishevë e Kosovë, - përfundoi ai. Si mesazh për nxënës, mësuesit dhe qytetarë të Malishevës, përmes reportit tuaj, z. Lach, tha: "Vazhdoni të mësoni, të punoni dhe ta duani njëri-tjetrin për ta përparuar vendin tuaj, ndërsa do ta keni edhe përkatësinë tonë të madhe".

Isuf Bytyri

e të gjithë shkolllarëve të mesëm dhe mbarevaljet e procesit asensor-educativ", tha drejtori i këtij Gjinnazi Jonuz Kastrati. Ai duke i falënderuar të pranishmit në emër të 1400 nxënësve dhe 70 punëtorëve, tha se edhe nxënësit japonezë, që ndihmuan në zbulimin e ambientit shkolllor në Malishevë, dëshmuar se angazhohen për bashkëpunim me shkolllarët japonezë, si dhe u zotua se do të angazhohen për ruajtjen e pastërtisë së objektit shkolllor. Mysafirët nga UNDP dhe Shoqatës japoneze "Adra", i përshëndet edhe z. Ismet Gashi, drejtor i Drejtorisë Komunale të Arsimit, Kulturës dhe Sportit në Malishevë. Kryesuesi i delegacionit mysafir - z.

Në lokalet e gjinnazit "A.Frashëri" UNDP-ja dhe ADRA mbajtën një brifing me gazetarë

## Pesë shkolla do të ndërtohen deri në fund të vitit

"U bindëm se Japonia është vend i lindjes së rrezeve të diellit dhe prosperitetit njerëzor", tha drejtori i gjinnazit "A.Frashëri", Jonuz Kastrati



REXHIEP KRASNIOI

MALISHEVË, 6 SHTATOR - Në lokalet e gjinnazit "A.Frashëri" të Malishevës, përfaqësues të UNDP-së dhe ADRA-së japoneze mbajtën një brifing me gazetarë rreth projektit të tyre për rehabilitimin e shkollave në Komunën e Malishevës, të merrkurën.

Z. Lach (Patrick) Ferguson, nga UNDP-ja, i cili e udhëhoqi brifingun, i njoftoi të pranishmit se po qëndronin pikërisht në njërin nga klasat e rinovuara nga UNDP-ja dhe ADRA.

Ai bëri të ditur se programi për rehabilitimin e shkollës që zbatohet nga partneriteti UNDP-ADRA përfshin 5 shkolla të Komunës së Malishevës: 3 fillore dhe 2 të mesme.

Buxheti i ndarë për këto punë, sipas z. Ferguson, është më se 2 milionë e 600 mijë dollarë të ndara nga Qeveria japoneze. Në fazën e parë të punës në aneksin e gjinnazit parashihet

rinovimi i objektit me 11 klasë dhe nxemje qendrore si dhe vënie e rrethojës së shkollës.

Në fazën e dytë, e cila kapërdin investimin prej 500 mijë dollarësh, u njoftua se do të ndërtohet një sallë e fizikulturës. U bë e ditur se së shpejti ADRA do të marrë përsipër edhe ndërtimin e një shkolle tjetër në Komunën e Malishevës.

Përfaqësuesja e ADRA-së japoneze, Mayumi, njoftoi se në Malishevë që prej një javësh po qëndronte një grup nxënësish japonezë, të cilët kishin paguar personalisht biletat vetëm për ta vizituar Koosvën. Ky grup tri ditë e fundit ka qëndruar në Malishevë, ku ka punuar së bashku me një grup të ngjashëm nxënësish të gjinnazit "Abdyl Frashëri" të Malishevës në zbulimin e shkollës dhe ambientit rreth saj.

Ajo falënderoi edhe kryerësin e punimeve në aneksin e gjinnazit, kompaninë "Inxhinieringu" nga Suhareka dhe shprehu fjalë lavdëruese për të.

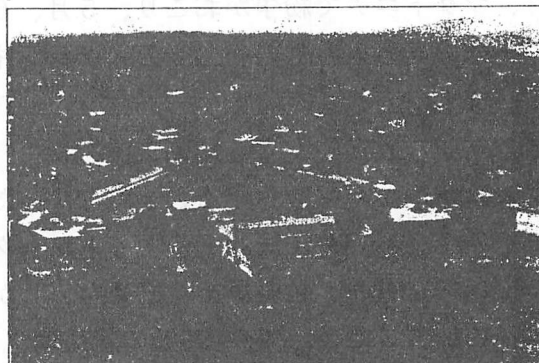
Z. Michael Dixon, nga ADRA, dha detaje për punët që po kryen kjo shoqatë në Komunën e Malishevës, kurse z. Bashir Sakhawarz, nga DASHK-u, pasi shprehu falënderimet e tij për investitorët, foli në superlativ veçmas për punën organizative të zonjës Mayumi nga ADRA.

Ne emër të DA-së së Malishevës përshëndeti dhe falënderoi drej-

tori Ismet Gashi, kurse në emër të gjinnazit "A.Frashëri", drejtori Jonuz Kastrati.

"U bindëm se Japonia është vend i lindjes së rrezeve të diellit dhe prosperitetit njerëzor", tha drejtori Kastrati.

Drejtori i gjinnazit "A.Frashëri" të Malishevës u ndau mirënjohje mysafirëve nga Japonia.





## UNHCR ジラネ事務所訪問

国際学部 2 年

渡久山 純子

9 月 1 日土曜日、午前 10 時に UNHCR（国連難民高等弁務官事務所＝本部ジュネーブ）のジラネ事務所に着きました。私達はそこで働いている UNHCR 日本人職員の根本かおるさんに会い、UNHCR の活動や、アルバニア系住民居住区とセルビア人居住区の村が隣り合わせになっていることや難民施設のことについて話を聞きました。

### 根本さんの話

ジラネはマケドニアとセルビアの間に位置する地域のため、紛争が起これば難民がジラネに流れてきます。紛争後、アルバニア系難民の帰還は終了しましたが、マイノリティの帰還が問題となっています。コソボにいたセルビア人 20 万人はセルビアへ、また、2 万人のロマ人（ジプシー）のうちジラネにいた 350 人はセルビア、マケドニアへ避難しました。UNHCR ではこれらの人々がまた、コソボへ帰還できるように手伝う活動を行っています。

活動の中心は、①4 万人程のマイノリティ定着支援②南部セルビアからのアルバニア系難民支援③マケドニアからのアルバニア系難民支援、の 3 点です。コソボにおける UNHCR の中ではジラネ事務所では特に難しい問題を扱っています。

ジラネにはマケドニアと接している南部にストゥルプツェという村があります。そこはセルビア人 1 万人が自給自足のような生活を送っています。しかし、アルバニア系と同じ地域で生活を送っているセルビア人もいます。そこでは、あたりまえの生活ができません。町まで歩いて買い物をすることができず、教会へ行くこともできません。移動の自由はなく、畑仕事も放牧することもできない、常に危険が伴った生活を送っています。UNHCR の願いは、国際社会の支援がなくても普通の安全な日常生活ができることです。

今回、私たちが訪問するツエルニツアという村は、アルバニア系住民とセルビア人が混在した村です。そこでは KFOR（コソボ国際平和維持部隊）の護衛や UNMIK のバスがなければ、案心した生活を送ることができません。ツエルニツアに住むセルビア人の一人は、「『かごの中にいる鳥』のような生活」だと言っています。特別な状況の中でなければ生活できないのが現状です。

今年の 2 月、マケドニアで紛争がおこり、5 月、6 月をピークに、マケドニアからコソボにアルバニア系難民 5 万人、そのうち 3 万人がジラネに流れてきました。現在、1 日約 2 千人が帰還しています。

根本さんは、以前、アフリカでも難民支援をしていました。アフリカとコソボの活動の違いは、コソボでは難民キャンプを作る必要がなかった点だと言います。コソボでは、マケドニアとコソボのアルバニア系住民同士のネットワーク（ホストファミリー制度）が強かったため、難民キャンプを設ける必要がありません。しかし、疎開先が見つからない 1 %の難民は寄宿舍に収容されましたが、残り 99%の難民は、自らホストファミリーを見つけました。

彼らは、コソボに長く滞在するつもりはありませんが、マケドニア人が、マケドニアの首都スコピエへの幹線道路でデモを行っており、国境は危険なため帰還できないのが現状です。

アルバニア系難民の支援は、国際機関の支援のもと特別プログラムに従って、国境を超えた疎開を支援しました。また、IOM（国際移住機関）の協力のもと、物資（マット、毛布）の運送や破壊された住宅、病院、道路や学校の修復、教育システムの再構築を行っています。

今回2人の通訳者、セルビア人であるアニツァさんと、アシカリ系ロマ人のラビアさんと一緒に、アルバニア系とセルビア人が混在する居住区と、マケドニアからのアルバニア系避難民が住んでいる寄宿舎を訪問しました。アシカリというのは、コソボのエジプト系ロマの人たちです。

UNHCR の話が終わると、アルバニア系とセルビア人が混在するツエルニツァへ向かいました。そこは人通りがほとんどなく、いたる所に KFOR の兵士がライフル銃を肩から提げて監視、巡回をしていました。訪問先のセルビア人の家へ行く途中、民家の壁に赤いスプレーで「NATO」と書かれた落書きが目に残りました。

私達は、この村に住んでいるセルビア人の話を聞きに行きました。

#### セルビア人、ミシェツ・ミレーさんの話

ツエルニツァでは、1999 年、50 歳の障害者が背後から銃で撃たれ死亡しました。これが最初の殺人事件でした。その年の 12 月、6 人家族が手榴弾によって殺害されました。また、店の前で KLA（コソボ解放軍）が子供を殺害する事件も起こりました。その時、KFOR が銃で応戦しました。

最近、起こった事件では、今年の 8 月に 80 歳の老女が帰宅途中、アルバニア系の攻撃に巻き込まれて死亡しました。事件後、KFOR は村を封鎖しましたが、4 日後に封鎖を解きました。この事件以来、KFOR は 24 時間ライフル銃を携帯したまま、巡回しています。

この村では、畑を耕すことも、作物を収穫することもできません。紛争前は、300 頭いた牛は現在、8 頭しかいません。以前ジラネにはセルビア人が 1 万 5 千人いましたが、現在は 300 人程になっています。彼は、現在住んでいる家や畑は自分のものだと言います。アルバニア系住民と隣り合わせに住んでいるのは、とりあえずこれしか選択しようがないからです。アルバニア系と共に住むことを避けてセルビアへ行っても、生活を支える術はほとんどないからです。

この村に住んでいるセルビア人は、買い物へ行く時、KFOR から許可をもらい、UNHCR のバスに乗ってセルビア人が住んでいる町まで行きます。彼は自分の子供たちに、なぜ、このような生活なのか、砲撃を受けて壊れた屋根を見せて、隠さずに教えます。

ミシェツさんは真剣な面持ちで私たちに説明してくれました。彼が話をしている間、2 人の KFOR 兵士が私達と一緒に話を聞いていました。話が終わる頃には、近所の子供たちがたくさん集まってきて、帰るころには子供達がライフル銃を肩から提げた 2 人の兵士とじゃれあっていました。KFOR のライフル銃を取ろうとした子供に兵士は「何に使うのか」と聞いたら、向こう側（アルバニア系住民居住区）にいる子供を殺すのだと、言っていました。



## 難民宿舎

ツエルニツアの訪問後、難民宿舎を訪問しました。そこではマケドニア紛争が激化したとき被害にあった西マケドニアから避難してきた人達が一時滞在しており、ムスタックさんという人の話を聞きました。当初、彼は私たちに話をすることで、彼自身が新聞に載り、酷い目にあうのではないかと心配していましたが、ただ話を聞くだけだと伝えたと、引き受けてくれました。

彼がマケドニアから避難してきたのは、村が攻撃されまだ安全でなく、3人の息子を徴兵されることから守りたかったからです。しかし、協力せずに避難してきたため、帰還すれば村八分にされることを恐れています。

難民寄宿舎には、2週間滞在する予定ですが、その後は、プリスティナにいるホストファミリーにお世話になります。ホストファミリーは、以前プリスティナへ行った時に友達になった人が紹介してくれた家です。しかし、長く滞在するつもりはありません。現在、国境が封鎖されていますが、仕事もお金もないため、国境が開きしだい帰還するつもりです。避難する以前マケドニアでは教師として働いていたので、帰還すれば仕事があります。危険でも帰るつもりです。ムスタックさんは、複雑な面持ちでした。

最後に、彼はアルバニア語で書かれた新聞を私たちに見せてくれました。その新聞の記事には、マケドニアの警察に暴行され、傷を負ったアルバニア系マケドニア人の写真が載っていました。彼は私達に、人権侵害を訴えていました。

紛争が終わっても、今だ、帰還することができない難民、避難民がいるのは確かです。また、以前、両民族は共に暮らしていたのに、今は対立しているのも現状です。私は近くに銃を持った兵士がいるだけで恐怖を感じます。ツエルニツアでは銃を持った KFOR 兵士が近くにいる、恐れるよりむしろ安心した態度でいる人に驚きました。KFOR の護衛なしで買い物ができ、両民族が安心して共に暮らせる、そんな日が早く来るのを願うばかりです。

## 地雷研修

8月30日午後、プリスティナ市内にある UNMIK(国連暫定統治機構)の MINE ACTION COORDINATION CENTRE と呼ばれる地雷研修センターへ行き、コソボの地雷に関する説明を受けました。UNMIK の事務所に着いた時、私達が目にしたのは、地雷がある場所に赤い印しがつけられた地雷マップでした。そこには、1999年8月と2000年8月の地雷マップがあり、2000年の地雷マップは1999年のそれに比べ地雷がほとんどありませんでした。事務所の外には、信管を抜いた様々な種類の地雷が展示されており、歩道と隣り合わせに金網で覆い被された敷地で、見る事ができました。そのためか、時々、自然に落ちているような地雷に、目を留める人もいました。

事務所を後にし、UNMIK の研修室で地雷について説明を受けました。研修室ではボランティアメンバー以外に、KFOR (コソボ国際平和維持部隊) やジンバブエから来たばかりの文民警察官らと席を共にしました。私達は真剣に、スライドによる地雷の説明を英語で受けました。

まず、地雷の種類について説明を受け、次に、地雷があるため危険な場所であることを知らせるサインについて、説明を受けました。

#### 地雷の種類

- |                     |                           |
|---------------------|---------------------------|
| ・BLAST MINE         | 普通の丸い形、一般的なもの。            |
| ・FRAGMENTATION MINE | 紐状の地雷に触れると爆発する、特に足を狙う。    |
| ・ANTI TANK MINES    | 車やタンクなどを攻撃する。             |
| ・EFFECT             | スプーンほどの大きさ。               |
| ・UXO                | あらゆるものを破壊する。              |
| ・BODY TRAPS         | トリック地雷。ドアなどに仕掛け、開けると爆発する。 |

地雷の種類について一つ一つ説明が終わる度に、「DO NOT DISTURB THEM」と言う文字が映りました。

#### 地雷を知らせるサイン

- ・頭蓋骨の下に骨を十字に組み合わせて描いた図形（ドクロ）。
- ・積み上げた石。
- ・MINE と書かれた手書きの看板。
- ・地面に刺した棒に上からペットボトルや、ビニール袋を被せてある。
- ・動物の死骸を張った紐にかぶせる。
- ・地雷がある場所に棒が立っている。
- ・大木を倒して道路を封鎖し、地雷がある場所へ行くことを警告する。
- ・穴があったら地雷がある可能性がある。
- ・家の周りに長い草が伸びている。通常、人が住んでいたら草は長くない。

スライドによる説明が終わる時、最後に以下の言葉が説明されました。

When in trouble,  
S—— Stop everyone  
T—— Think clearly  
O—— Orientate and report  
P—— Prepare for help

#### Reporting

What you see.

Where it is.

Give a rendezvous point.

ビデオ研修の後は、屋外に出て実際に信管を取り除いた地雷を見ながら、地雷の種類や特



徴、どのような場合に使われるのか説明を受けました。その後は、実際に地雷を知らせるサインがどこにあるかを、参加者が探し研修は終了しました。

9月1日、プリズレンへ行く途中、実際に地雷撤去作業している現場に立ち寄りました。現地ではジンバブエの NGO 団体 (MINE-TECH ZIMBABWE DEMINING MINE DOG CENTER) が活動していました。地雷撤去の NGO として有名です。海外からの支援を受けた彼らの指導の下、地元のアルバニア人たちが地雷撤去のトレーニングを受けていましたが、地雷撤去現場を近くで見ると危険なため、私たちは実際の作業は見ることはできませんでしたが、少し離れた場所に置かれた地雷撤去道具を間近に見ました。

#### 地雷撤去活動をしている人の話

なぜ、地雷撤去をするのかと聞くと、何も知らない子供達が森にフルーツを採りに行き、悲惨な目に遭うのを見過ごせない、とジンバブエからやって来た NGO のリーダーは言います。しかし、地雷撤去はやはり怖いもの。後もう少しだからと、地雷撤去を長時間やると集中力が切れ、けがをすることもあります。彼は常に自分に厳しくなければならないと言います。

研修を受け地雷についての知識を得たものの、気を緩めてはいけません。地雷撤去は NGO のリーダーが言われていたように集中力も大切ですが、体力も必要である危険で緊張を強いられる作業です。実際に、地雷撤去の現場を見ることはできませんでしたが、地雷撤去の道具を見て、安易に草むらに足を踏み入れるのが少し怖くなりました。.

## SRK プロジェクトの視察

国際学部 3 年

東 健一

国際的なNGO組織である ADRA International の日本支部 ADRA Japan では、国連開発計画（United Nations Development Program）の委託を受けて、SRK（School Rehabilitation in Kosovo）プロジェクトという学校復興建設事業を行っています。このプロジェクトでは日本政府が国連に拠出した資金約 3 億円を使い、紛争で破壊されたり、施設として十分に機能していない 5 つの学校の再建をしています。今回このプロジェクトの建設現場を見学しました。

はじめに訪れたのは、バリンツァ小学校でした。6 教室が建てられ、1 キロほど離れたところから水を引き、水洗トイレを設けます。そして、コソボでは冬季に日中でも気温が氷点下に下がったままであることから、暖房設備としてストーブとセントラルヒーティングが用意されます。しかし、セントラルヒーティングはすぐに使えるわけではありません。10 年後にセントラルヒーティングが開始されるとしても今の段階で設置しておかなければ、あとから設置するには支援国が見つからないなど難しいとことがあるためです。1 つの施設に対して複数のドナーが入るのは敬遠されるからです。ここでは地元業者との契約時に完成予定日より 1 日遅れるごとに約 100 万円のペナルティーを決めています。そして、ドイツ KFOR 人道援助部隊がエンジニアと現場監督という立場で協力をしています。学校前を幹線道路が走っているため、これを横断して通学する生徒の交通事故も大きな問題で、交通安全指導なども今後の重要課題になっています。

ユニークで近代的な形の校舎をもつのはキエボ技術高校です。この高校は授業の専門性などから生徒数も多く、19 教室という大規模な建設となっています。当初建設の費用を約 1 億円と見積もっていましたが、実際は半分の約 5 千万円で建設できるようになったとのこと。現場で使われている資材はなんとセルビアから運ばれていて、憎しみ合う土地からということにとっても不思議な感じを覚えました。ここでは毎日約 50 人もの建築作業員が働いていて、来年 1 月の完成予定です。

クレバサリ小学校は建設中の校舎のとなりにひどく破壊されたセルビア教会がそのまま残っていて、そこが紛争地であることを強く思い出させました。逆どなりには、ドイツの援助で途中まで工事が行われたものの、そのまま放置されているコミュニティーセンターがありました。建物は完全に無駄になってしまっていて、援助の難しさや問題点が表れている建物でした。校舎はというと教室の数が 8 つで廊下には障害者用のスロープも作られるようでした。

景色がとてもきれいな丘の上に建てられているのはバニヤ小学校です。この小学校はマリシェボ市長の要請によりバニヤ村に建てられているものです。この地区には 2.5 キロ離れた所に中規模の小学校がありますが、その通学路には車が増え、登下校中の子供たちの交通事故が多発し大きな問題になっていました。この学校が建てられることで子供たちの通学路を



変え、事故を減らそうというねらいがあります。教室は4つほどあり、図書館も建設されます。その図書館は小学校だけのものではなく地域の人々にも開放され、広く利用される予定です。

マリシェボ高校は唯一校舎がすでに完成した学校でした。建設された新校舎は10年以上前に工事が始まりましたが、途中で中断されてそのまま放置されていました。しかし、生徒数の増加により新校舎が必要になりました。途中まで建設されているとはいえ、ずさんな工事や、10年以上も放置されていたので傷んでいる個所も多く、かなりの手直しをして完成されました。今後は体育館の建設が予定されていて、完成後はマリシェボ市民の多目的ホールとしても活用される予定です。

以上の5校がSRKプロジェクトの対象になっている学校です。現場を視察し話を聞いているうちに、現地の人のために何か物を作り、残していくことの難しさが伝わってきました。国際援助が決して自己満足になってはいけないということ、しかしそのためには細心の注意を払わなくては実はどこかで問題は簡単に発生するということです。今回は3億円という予算の中でプロジェクトが進められましたが、その資金を最大限に生かしていく工夫、学校の敷地内にありながら現地の人々が幅広く利用できることなどです。地元企業の入札の時にも不正のないよう注意しなければなりません。援助という言葉が使われている以上は、現地の人たちのニーズにしっかりとこたえるものでなければならないのです。今回私たちが見てきたものはコソボの人たちが本当に喜んでくれる学校建設であると思います。しかし、本当の結果はすべての学校が完成し、子供たちが通い、彼らが判断して初めてわかるものなのだと思います。

参考文献 『ADRA News』 2001/06 VOL.17 48号

### 私がコソボに行って

長い準備期間を経て実際にたどり着いたコソボは、ある面では予想どおりでした。それは破壊された建物や、街中を走り回る装甲車や軍用車両、ボコボコの道路、停電や断水でした。しかし現地で生活をしていくと、予想をはるかに上回ることの連続でした。それは、道を歩いていると声をかけてくる人々の明るさと、その奥にある心の傷です。セルビア系住民のリーダーが話をしてくれた時の今にも爆発しそうな、聞いている私が恐怖を感じるぐらい感情のこもったあの強い口調は、紛争の心の被害を強く感じた瞬間でした。普段は明るい現地スタッフがアルバニア系の人々だと感じたときや、大きなモニュメントがある見晴らしのいい公園や小学校の裏など、なにげないところにお墓を見つけたとき、ここでは多くの人たちが殺されたのだと改めて感じさせられました。ラチャック村やマリシェボ高校に行った時のあの歓迎ぶりは、はじめは理解できませんでした。なぜこんなに喜んでくれるのか。でも今は少しわかるような気がします。彼らはきっと寂しかったのではないかと。そして現地でがんばる日本人をはじめ国際機関のみなさんが並々ならぬ努力をしたのだと。彼らにしてみれば日本人は現地で働く国際機関の人たちだけでイメージされます。そこへの感謝の気持ちがあの時私たちに返ってきたのだと思います。

日本に帰ってとても驚いたことがありました。それまでコソボとカンボジアの区別もつかなかった私の友人達からミロシェビッチの名前が出たことです。そんなことかと思う人もいるかもしれませんが、今や私の友達の中にコソボを知らない人はいないのです。本当に驚いたし、嬉しくなりました。

コソボでは今までにない本当にいい経験をさせてもらいました。今回チャンスをくださり、最初から最後までお世話になった中村先生、コソボの母笹子さん、我らのボス真由美さん、いつも明るい現地スタッフの皆さん、本当にありがとうございました。そして出発前に心強い応援をしてくれた友人達、暖かく見守ってくれた家族に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



## マリシェボ高校での活動（壁画班）

国際学部 3 年

藤井 博之

メンバー：友田幹久、中澤直子（1 階）

松葉温子、東 健一（2 階）

野村朋代、藤井博之（3 階）

今回のコソボ・ボランティア・プロジェクトの中で一番時間を費やしたものが、SRK (School Rehabilitation in Kosovo) プロジェクトにおけるマリシェボ高校での活動です。その活動内容は、完成間近の新校舎の壁にペンキで絵を描くことと、玄関ロビーや玄関前に花壇を作ることでした。

壁画の担当は 6 人で、三階建ての校舎各フロアの壁に 1 カ所、各階に二人ずつのチームに分かれて描くことにしました。絵を描く壁のある場所は、1 階は入り口付近の廊下、2、3 階は階段を上がってすぐの所にある多目的ロビーの近くでした。

絵のテーマ、デザインは自分達で決めることになりました。話し合った結果、各階それぞれ空、風、海のテーマで描くことに決定しました。そのテーマを基にコソボにあるアドラの事務所で下書きの絵を何枚か描き、意見を出し合って少し変更したり、2 つを組み合わせ一つにしたりしました。

デザインが決まったら、今度はペンキや筆などの画材の買出しに出かけました。これがなかなか大変な作業で、日本のように色が豊富にあるわけではなかったもので、実際売っているものは下絵と違う色しかなかったのです。しかも、下絵を描くときにクレヨンを使っていたので、ペンキでどの色を買っていいのか、その場でのイメージがなかなかわいてこなかったのです。仕方がないので、ある色をとりあえず買って、宿舎にもどってペンキを使ってもう一度デザイン画を描きました。ある色が少なかったもので、試行錯誤でいろいろ混ぜて下絵に近い色を作ったりしました。みんな、少し先が思いやられる感じを隠し切れない様子でした。

一緒にやるマリシェボ高校の生徒が 2、3 人ずつ各壁画の製作に加わりました。共同で絵を描くには、まずやらなければならない事がありました。それは、下絵をパートナーの生徒に見せて、それをどういう風に作業していくというのを伝えることです。マリシェボ高校の生徒たちも僕達もそんなに英会話が上手というわけではなかったもので、こっちのやりたいことを伝えるのは、なかなか簡単な事ではありませんでした。もちろん、マリシェボ高校の生徒達もここはこうした方がいいのでは、といった意見を出してくれました。面白かったのは、パートナーの生徒たちのキャラクターが各グループによって違っていった事です。1 階は、その場のノリでワイワイ絵を完成させていくタイプ。2 階は下絵を基に描いた絵にどんどん何かを付け足していくタイプ。3 階は下絵を忠実に再現しようとするタイプでした。

壁に大きな画を描くという作業はみんな、ほとんど経験したことがなかったので、なれない手つきで一所懸命がんばっていました。すでに完成されて、ペンキも塗られていた壁の上に画を描いていくのは神経をつかうもので、みんなの表情は真剣そのものでした。

自分の顔や服にはべたべたペンキをつけて作業していく様子は、学校建設に来ているほかの作業員とまったく変わりませんでした。

1 階の絵のテーマは『空』で、黄色、水色、オレンジ色を基調とした絵で、何かの模様のように太陽、雲、鳥が描かれていました。

この絵の意味は、太陽には大きな目標、夢、希望、鳥にはその目標に向かって行くコソボの若者達、雲にはその鳥が目標に向かう途中にある障害、そして時には支え、という意味が込められていました。

2 階の絵は、白、水色、緑、黄緑色がくっきりと描かれた絵でテーマは『風』でした。白以外の色で表現された丘、森、空の上を白で描かれた風が吹き抜けるという絵でした。この風というテーマには、風は国境や民族の違いなど関係なく自由に吹くもので、今後コソボにいるアルバニア人とセルビア人が自由に行き来できるようにという願いを表したものでした。

3 階の絵は『海』がテーマで、濃い青と白、黄色で描かれました。この絵は、1、2 階の絵と違い、色の区分がはっきりした絵ではなく、曲線をうまく利用していて、なんとなくぼやけた感じの絵になりました。濃い青をバックに白い波を表したものが描かれていて、深海をイメージさせるものでした。この絵のコンセプトは"躍動"で、その言葉通りコソボの人達がこれからも生き生きと活動していつてもらいたいという想いがよせられていました。

どの絵も大体縦 1.5 メートル、横 2.5 メートルくらいでしたが、それぞれ違ったインパクトをもつ絵に仕上がったと思います。

#### ・感想

今回、参加したこの SRK プロジェクトは学校の修復ということを目的としていました。そしてボランティアとして、そのプロジェクトを手伝うことがその内容だと思っていました。しかし、僕にとってそれは作業ではなく、コソボの人達との交流でした。作業を通してマリシェボ高校の生徒達とコミュニケーションをとって一つの目標を達成する。これは、何かを得るためにこのボランティア・プロジェクトに参加した僕にとって、とても意味のあるものでした。お互い英語が上手くなくても、なんとか意思の疎通ができたし、一緒に笑いながら作業したり、完成したことに喜んだり。セルビア人との民族紛争という心の傷をもちながら、全く民族の違う僕らとは一丸となって作業をし、絵が完成した時の感情を共有するということは、学校修復を目的としているこのプロジェクトの本当の目的であったように思えます。

もちろん、絵がずっとあそこに残るということも、とても嬉しいことです。もしかしたら、もうコソボに行くことはないのかもしれないけど、あの絵が残っていることは、僕達がコソボに行った証でもあるし、絵を見ることによってマリシェボ高校の人達が僕らのことを思い出してくれれば最高です。

最後に、なんとか意思の疎通がとれたとしても、やはり会話力がとても大切ということを実感しました。身振り手振りでは自分の本当に伝えたいことや、相手の考えをはっきりと理解したわけではありませんでした。このやりとりがしっかりしていれば、もっと楽しむことができたと思うし、お互いもっと友情を深められたのではないのでしょうか。自分の気持ち、相手の気持ちを 100%理解し合うためには、やはりコミュニケーション力がもっとも大事なのだと思います。



## マリシェボ高校での活動（花壇班）

国際学部 3 年

小澤 麻子

メンバー：伊丹知子（リーダー）

河 明子

渡久山純子

小澤麻子

長井喬充（ADRA インターン）

山口貴子

このコソボ・ボランティアプログラムの中で、もっとも時間をかけたのがマリシェボ高校でのこの活動だ。これは SRK (School Rehabilitation in KOSOVO) プロジェクトを進める ADRA JAPAN が学校建設などのハード面の援助だけでなく、そこに通う生徒たちの心一つまりソフト面にも力を入れているために作られたプログラムの一つであり、この活動の目的はアルバニア人、日本人学生の交流にととまらず、援助という形で与えられた学校をどのようにとらえ、使っていくのかを自ら考えてほしいというところにある。

8 月 31 日 SRK プロジェクト視察の一環としてマリシェボ高校に立ち寄った際に、自分達でこれから作業する花壇を見た。話には聞いていたが、実際に見るのはこれが始めてである。一部工事中の部分もあるが、足や手を使い大体の大きさを調べ、生徒達との会話の中で好きな色などを聞く。実際に作業する花壇は 2 つである。一つは、本館玄関正面左にある縦 2.7 メートル、横 3.3 メートル、深さ 50 センチの花壇。もう一つは正面玄関の左、建物に沿うように L 字型につくる屋外の花壇で、長さが 6 メートルと 10 メートル、幅 2.7 メートル、深さ 32 センチである。またそれとは別に校舎内に置く正方形と長方形のプランターがそれぞれ 8 個と 12 個である。花壇の中に入れる土（プランター、屋外、屋内ともに同じ物を使用する。）は、既に屋外に山積みになっていた。

実際に自分達で目で見ただけで、これからの作業での問題点が挙げられた。

まずは階段下の花壇であるが、場所柄当然と言えば当然であるが、日差しはほぼ当たらず、水はけ状態にも不安がある。また、校舎内に屋外と同じような形の花壇を作るという今まで見たことも、経験したこともない事態に、メンバーの多くは戸惑った。校内設置用のプランターであるが、日本でよく見かけるプラスチック製の物ではなく、コンクリートで型取った物でかなりの深さ、厚みがある。その重さは成人男性が 2～3 人でやっと運べるほどである。動かすことが容易ではないという点から設置場所をよく考えなければならない。生コンクリートではあまりに荒々しいので、白いペンキでお化粧をする必要もある。ここでも、プラスチック製のプランターを想像していたメンバーは戸惑うこととなった。

9 月 2 日 明日からの作業準備をする。まず、作業手順を決める。作業のおおまかな流れとしては、第一にプランターに白いペンキを塗り、次に階段下、屋外の花壇の順で取り掛か

り、最後にペンキが完全に乾いたプランターに土を入れ、花を植えて完成とした。

必要な作業道具は、ペンキ、はけ、シャベル〈大・小〉、荷車、軍手、ビニールシート（ペンキを塗る時や、校内に土を運び入れる時に下に敷く）、麻袋（土を運ぶ）、掃除用具、バケツ、たわし（掃除用のほかに、ペンキを塗る前にプランターについている土を落とすため。）である。この道具を買い集めるために、ADRA スタッフとともにメンバー全員で店を回るが、なかなか品物が見つからない。麻袋はコソボでは売っていないと言われ、20 キロの重さまで耐えることが出来るとして勧められた手提げのビニール袋を購入するなど状況に応じて対応するが、結局すべての物をそろえることは出来ず、マリシェボ高校付近の店の方がこういった道具はそろっているという ADRA スタッフの言葉を受けて帰宅する。

次にそれぞれの場所に植える植物を考える。「植えたその一瞬だけ、綺麗であってもそれは自己満足でしかなく、意味はない。自分達が帰ったあともそこにしっかりと根付く物でなくてはならない。」という言葉に胸に色々な条件を出し合っていく。

第一に屋外の花壇である。ここに植える植物は氷点下 20℃にもなるコソボの冬に耐えられる物でなくてはならない。よって、『木』を植えることにするが、将来のことを考えると落ち葉が沢山落ち、掃除が必要な物は不向きであるという点から、強く、掃除の必要がない常緑樹を選ぶことにする。

第二に玄関ロビーの花壇である。ここは上記したように、植物が育つ上で恵まれた環境とはいえない。そのため『花』ではなく、観葉植物を選ぶことにする。

第三にプランターであるが、ここは三つの花壇の中で唯一『花』を植えることが出来ると考えられる場所である。しかし、冬のことを考えるとやはり、強い花が条件となってくる。また、高校生に好きな色を尋ねたときの答え「赤と黒」。これはコソボのアルバニア人も使っているアルバニアの国旗の色である。コソボでも多くの家でこの国旗を掲げている。私達に置き換えるならば好きな色を「赤と白」と答えるというになる。

この日行った花屋は合計 4 カ所。3 軒目まではメンバー全員が店の中に入れなほどの小さい店で、売っている物も観葉植物ばかりで、鉢に植わっている花を見ることすら出来なかった。4 軒目はビニールハウスらしき物と外には木などが植わっている庭があり、中庭のビニールハウスの中で咲いていたのは真っ赤な花だった、しかしよく見ると異なる種類の赤い花も、枯れている物も一緒に並んでいる、天井のビニールも破けている。「これが売り物なのか。」日本の常識から言ったらそんな言葉がぴったりだった。それでも、そこには赤い花以外にも何種類かの花と階段下用に使えるような観葉植物、モミの木のような物があり、それらを購入することにした。「そこにある物を使って、ベストを尽くす」。このプログラムの説明を受けたときに 2 年間コソボで活動している ADRA のコソボ事業担当である渡部真由美さんに言われた言葉をメンバー誰もが実感した瞬間だった。

9 月 3 日 天気にもめぐまれ、少々緊張しながらマリシェボ高校に向かう。簡単な説明の後、マリシェボ高校の生徒もこちらもお互いに緊張の面持ちで作業が始まる。今日の作業予定は、プランターのペンキ塗りと、玄関ロビーの花壇への土入れであった。日本から持ってきた軍手を一緒に作業をするマリシェボ高校生にも配り、一階に置いてあったプランターを広いスペースが確保できる二階へと移動させようとして、ふと高校生たちの手を見ると、軍



手の滑り止め用のブツブツがある面を手の甲側にしている。それは掌側にするのだよとジェスチャーで伝え、恥ずかしそうにクスクスと笑っているうちにみんなで大爆笑となった。そんな小さな事でお互いの距離はぐっと縮まった。

高校生のほとんどに英語が通じないため、すべての作業はジェスチャーが頼りである。

プランターをやっとの思いで2階にあげ、ペンキを塗る。それと同時に当初の予定を変更してプランターの中に入れる土を校内に運び入れることにする。手提げ袋に土を入れ、それを両側からもって校内に運び入れる作業の繰り返しで、重労働であるが、アルバニア語、日本語を教えあったりして笑い声が絶えない。時間がかかると思われていたペンキも早く乾いていたため、プランターを校内各フロアのロビーなどに設置した。

プランターに土入れをすることになったものの問題が発生した。まず運び入れた土である。運んだ時には気づかなかったのだが、大小さまざまな粘土質の固まりが多く混じっていたのだ。それだけではなく、土自体も硬く、とても園芸用とは思えない。何かいい案はないか、なにか使えそうな物はないかと皆で考え、ここでも校庭に置いてあった工事の際に使われたと思われる土（こちらはサラサラである）を運び入れ、元の土と混ぜて使うことになった。小さいシャベルなどない、手と掃除用に購入したちりとりを使い作業をした。つらい作業に付け加え、言葉もろくに通じないのに笑い声だけは絶えない。

結局この日の作業はここまでとなった。屋外花壇の設置場所に落ちている雨樋の配置換えなど花壇の基礎工事も未完成という予定外の事情で作業は大幅に遅れた。花壇づくりの予定日はあと1日半。

9月4日 この日の作業は玄関ロビー、屋外の花壇づくりだ。まずは玄関ロビーの花壇の基礎用に砂利を運び入れる。袋、バケツ、荷車を使用してドンドン運び、実際に敷き詰めるとなると想像以上に大量の砂利が必要である。何十回と砂利の山と花壇を往復しやっと基礎は完了した。

園芸用の土の状態は昨日にも増して悪かった。それに加え、園芸用の土と混ぜて使用した土も、だんだんとサラサラな部分がなくなってしまった。この2つを混ぜ合わせることによって昨日は事なきを得たが、今日はそのようにはいかない。土を運び入れるたび、土の塊が花壇の中に増える。クワでほぐすにも粘土質のその固まりはクワの刃にくっつくばかりである。「ミミズ売ってないかな?」。誰かがついそんな言葉を口にした。仕方なく、土を半分入れたところで中断し、一つ一つ手でほぐしながら、硬く固まった粘土状のものは取り除いてゆく。途中から近くの小学生も手伝ってくれる。広い花壇の中で、それは途方もない作業だった。

一方屋外の花壇では建設工事用のショベルカーが急きょ応援を買って出ってくれ、砂利と土を入れてくれた。作業はここまでで終了し帰宅後、新しく紹介された花屋に行く。店の倉庫のようなところに案内された。そこには本当に美しく、健康なこれぞ売り物と言うような花と観葉植物が何種類も棚にびっしりおいてあった。今まで購入した物の一部をキャンセルし、新たに購入することにする。店の人のアドバイスを参考に、菊に似た花（プランター用）と赤い色の観葉植物（階段下に追加）に決めた。

この日の作業はショベルカーを使ったこともあり、作業は大幅に進んだ。しかし、土の間

題は解決できていない。階段下の花壇は半分土を入れていない。明日までに、完成することが出来るのかという不安とともに、この土で植物が成長するのは不可能なのではないか、今日作業にあたったメンバー全員は考えていた。町に放置してあった無残なプランターの話が出る。「その時だけ綺麗でも意味がない」という言葉も思い出される。しかし、中途半端な状態で終わらせるわけにはいかない。絶対に完成させて帰りたい、理由はさまざまであっても、メンバー全員の強い思いである。

そんな時、ADRA スタッフでもある現地の建築設計士から近くの学校からサラサラな土を明日もって来ることが可能かも知れないと言われ、少しの希望を持つ事ができた。

9月5日 最終日、晴天である。2時から始まる、SRK の増築工事と花壇完了の記者会見が既に予定されており、地元のジャーナリストや地域の名士たちも既に参加することが決まっているという。それまでには掃除を含めすべてを終了させなければならない。

マリシェボ高校に向かう車の中で ADRA スタッフの携帯電話に新しい土が学校に到着したという連絡が入った。ほっとしたのと同時に、交渉してくれたスタッフに感謝の気持ちでいっぱいである。

土はサラサラで、状態はとてもよかった。早速、半分までしか土が入っていない階段下に、新しい土をどんどん運び入れる。この時になると、20 キロまで絶えることができると購入した袋も手提げ部分や、底の部分が破れるなどひどい状態である。それに加え、バケツの底も破れた。バケツの底に破れた袋を敷いて使うなど工夫をして何とか作業を続ける。屋外の花壇は前日ショベルカーを使って土を入れたため、大きな土の塊がゴロゴロしている。これを取り除かなければ、木を植えることはできない。みんなで、一つ一つ取り除いてゆく。これも、大変な作業である。新しい土を今から足すことは時間的に言っても無理である。しかし、このままの状態で植えることもできない。そのため、木を植える個所に大きな穴をあけ、その周りだけに新しい土を入れた。

プランターに花を植え、屋外には木を植える。玄関ロビーの花壇には最後に購入した赤い色がついた観葉植物を置き、それを中心に円を描くようにもう一種類の観葉植物を植えた。これですべて完成である。「これが売り物なのか」と思いながら購入した赤い花も白いプランターに映えて、とても同じ物とは思えない位である。高校生も「きれいだね」と、とても気に入ってくれたようで、うれしさは一層こみ上げる。

一つ残念だったのが、今までの作業の遅れと、2時までには掃除まで終了させなければならないという関係で時間がかなり押していたために、完成！という瞬間をみんなで味わうことなく、次の作業に移らなければならなかったのである。みんなで完成した花壇の前で記念の写真を撮ることも出来なかった。心残りである。

花壇班の活動が無事終了できたのは、マリシェボ高校の先生、生徒、はもとより工事現場の作業員、ADRA スタッフ、中村先生、作業終了後手伝ってくれた壁画班、そこに居合わせたすべての人の協力があったからだと思う。土の状態は完璧とは言えない。花も木も枯れてしまう時が来るかもしれない。しかし、これからマリシェボ高校の生徒自らが手を加え、自分たちの学校よりよい花壇にしていってほしい。その時、どろどろになりながらも、笑い声が絶えることなく続けたこの三日間を思い出してくれたらうれしい。いつかまた花壇のその後

を確認するためにマリシェボに戻りたい。ボランティアのメンバー全員の思いである。

### コソボ・ボランティア・プログラムを終えて

とにかく無我夢中ですごした二週間でした。いろいろな人と出会い、話を聞き、時にダンスをし、笑い合い、ともに作業する。そんな中で、紛争で引き起こされたすべての事が、コソボに住む彼らにとってそこにある物なのだということを、「平和」という事がどれだけ重い意味を持っているのかを肌で感じました。

プリズレンを訪れた時、コソボでもっとも美しいといわれるその町並みに私はすっかり魅了されました。町を歩いていると一つの光景が目にとまりました。橋の上に止まる戦車と装甲車そして、その横をまるでそれが道路標識であるかのように気にも止めず往来する人々でした。戦車という本来なら人々に恐怖感を与える物が、コソボでは逆に人々の安全を作っていました。私たちがコソボ各地を回ることができたのも、それがあったからだと思います。

ちからで作られたこの状態は真の平和とは言えないと、思いました。しかし、人々の口から紛争で起こったこと、感じたことを聞くほど、もし自分がその立場だったらと考えるほど、共存、平和というものが遠く果かなく感じられました。そんな中で、真の平和を目指し自分の心の傷を乗り越えようとする人々、地道に活動を進める国連、NGO 関係者に出会いました。そして私は感じました、そこに平和を願う人がいる限り、決してあきらめてはいけな

最後にこのような機会を与えてくれた中村先生、おちゃめな笹子さんと真由美さん、いつも笑わせてくれた現地スタッフの皆さん、ハチャメチャが多かった私を支えてくれたメンバーのみんな、そしてハラハラしながら待っていてくれた友達、家族、本当に本当にありがとうございました。



# Workshop 1

## ーコソボの未来についてー

国際学部 3 年

中澤 直子

8 月 30 日、私たちは 2 つのグループに分かれてコソボが独立すべきか否かをディベートしました。

### グループ 1

メンバー：東・伊丹・河・野村・藤井・中澤

主張：「コソボは独立すべきでない」

### グループ 2

メンバー：松葉・小沢・渡久山・友田・長井・山口

主張：「コソボは独立すべきだ」

ディベートを行う前に ADRA が準備してくれた資料を読み、それぞれのグループでどのように主張するかを話し合い、意見をまとめディベートに臨みました。ディベートのやり方は、各グループで 2 名のプレゼンターをたて、そのプレゼンターが 10 分間で各チームの論点を言い、その後その他の人たちが相手チームの論点に対し反論・反撃するというものでした。

#### 《グループ 1～コソボは独立すべきでない～の主張》

- ・ 経済的にすぐに独立するのは無理
- ・ 現在コソボが抱えている問題をどう解決するのか
- ・ 世界がコソボの独立を認めると、他の独立を求めている民族の独立も認めなくてはならなくなる
- ・ 今の状態で独立するということは、アルバニア系住民が中心になるのでセルビア系住民がマイノリティになってしまう。また同じような紛争が起こるかもしれない危険性がある。

#### 《グループ 2～コソボは独立すべきだ～の主張》

和解に向けた独立

- ・ アルバニア系とセルビア系の生活習慣の違い（文化・宗教等）
- ・ 歴史的背景
- ・ 外交権の問題
- ・ コソボが独立することで他の民族紛争解決の糸口になる。

以上が各チームの主な主張でした。ディベートをやっている中で、各チームが考えている独立の時期が異なっているという問題が出てきました。グループ 1 は「今すぐの独立」ということを前提に、グループ 2 は「将来的に独立」を前提に主張し合っていたため、お互いの主張がうまくかみ合っていなかったのです。話し合いの結果、10 年を目安にするということに決

まり、それぞれ主張・反論し合いました。白熱したディベートの中、相手の主張に思わず納得してしまったり、相手側の主張に沿った発言で混乱してしまったりというハプニングもありました。各チームの主張・反論が終わった後、自分がどちらのチームにいるかは関係なく、独立に賛成か反対か手を挙げました。どちらの人数が多いか少ないかに関係なく、ジャッジをするのは渡部さん、橋本さん、中村先生でした。結果の発表の前にディベートのやり方について大事な点を何点か指摘されました。

#### 《ディベートのやり方》

- ① 相手を説得するための論点・論理を明確にする。
- ② きちんとした話し言葉を使う。言葉・様式のルールを守る。
- ③ スピーカーの姿勢をきちんとする。

#### 《各グループに対する3人の評価》

##### グループ1

- ①話し方がカジュアルすぎる。
- ②論点・論理が明確である。

##### グループ2

- ①言葉・様式のルールはきちんと守られている。
- ②論点・論理が不明確である。

#### 《結果》

グループ1の勝利

#### 《感想》

以前から海外ボランティアに興味があったので、初めて中村先生からこのお話を聞いたとき、迷わず行きたいと思いました。海外はもちろん、国内でボランティアをしたことがなかったので自分に何ができるのかは分からないが、この目で現地の状況や人々の様子を見たい、知りたいと思いました。紛争地に行くということや今のコソボの状況を知らないということで両親や友達など周りの人はとても心配していましたが、不思議と私は恐怖を感じませんでした。

初めてコソボを見たとき、ウィーンからたった2時間でこんなに世界が変わるのかとこれが戦争なのだと感じました。破壊された家、町中にある KFOR の兵士・装甲車・戦車など自分の目では見たことのないものばかりで、初めて怖いと思いました。コソボでの生活は、断水や停電はあったものの想像以上に快適なものでした。

私が行く前に頭の中に描いていたコソボの様子は、しみりした感じだったのですが、アルバニア系住民の町や人々は活気があって、陽気に見えました。しかし、実際には人々の傷は深く、ADRA のコソボ・スタッフで普段は陽気なアルバニア系の2人がセルビア系住民の話を聞きに行った時、「セルビア人の臭いがするから行かない」と言った時はショックというか、何とも言えない気持ちでした。ミトロビツァの町に行った時も、セルビア系住民が多

く住んでいる北側には行けなかったりと、両民族の溝の深さを痛感しました。ミトロビツァの北側の町は、今まで私たちが生活していたアルバニア系住民の町とは違い、とても静かで、人々の表情も強張っていて、道を歩くだけでもとても緊張し、怖かったです。

コソボで NHK がかつて放送したノンダブルカ小学校のビデオを見て、実際にそこの校長先生やその他の先生の話を書いたり、生徒と交流する機会があったりしたのですが、そこであらためて戦争が子供の世界にまで入り込んで深い傷を負わせていると実感し、やるせない気持ちでした。しかし、いつかまたセルビア人と共存の社会をつくろうという校長先生達の話を書いて、こういう人たちがいるなら、昔のような両民族の共存という希望は持てると思いました。

コソボでたくさんの人々の話を聞いたり、いろいろな町や現場に行けたことはとても貴重な体験でしたし、マリシェボ高校で、そこに通う高校生と共に言葉の壁を乗り越え一緒に壁画を制作したり、花壇を作ったり、ダンスをしたことは忘れられません。Workshop は初めての体験でしたが、それぞれの立場で問題を考えるというのは、今まで考えなかったり、思いつかなかったことを発見したりと、自分の視野が広がって面白かった。私は NGO の仕事に興味があったので、どういうことをしているのか、どういう問題があるのかなど直に知ることができ、勉強になりました。

コソボでの2週間は、毎日忙しかったけれど、とても充実していてあっという間に過ぎました。帰る日にマリシェボ高校で一緒に作業した高校生が空港まで見送りに来てくれたのはとてもうれしかったし、アドラ・スタッフのゼチャやメリータ、マイク、まゆみさん、それにマリシェボ高校のみんななどお世話になった人たちや、仲良くなった人たちとの別れはとても悲しいものでした。出発前の準備に始まり、メンバーと協力してやったいろいろなことはとても良い経験でした。ADRA のスタッフの方々を始め、このような機会を与えてくださった中村先生や行くことに理解を示し、応援してくれた家族には深く感謝しています。



## Workshop 2

### - Project Formulation -

国際学部 3 年

野村 朋代

『Project Formulation』これが workshop2 の課題であった。私たちにはいくつかの情報が与えられた。情報は、『一国内において民族対立が起こり、難民発生。紛争は収まり、一民族の難民は帰還し始めているものの、もう一方の民族に関しては、いまだ帰還できず』といった内容であった。と言っても、A4 サイズの用紙半ページに収まる程度の本当に簡単な説明であった。この workshop は私たち参加者が 2 つに分かれてグループを作り、この状況説明を元に各グループが NGO として援助のプロジェクトを立案し、プレゼンテーションを行い、どちらがドナーを納得させ、オファーを獲得するかということを争うゲームである。私たちはこれをゲームとして行ったわけだが、実際これはこれまでの NGO がプロジェクトを立ち上げる過程をほとんどそのまま再現したものだと後になって教えられ、プロジェクトの立案の難しさや自分たちの思うようにいかない歯がゆさを感じながら、一方で現実を見つめた難しさに立ち向かう経験を得られたことに妙な満足感を感じていた。

情報量の少なさ、私たちはこの課題を進めていく上でまずこのことに驚いた。先に述べたように、状況説明は用紙 1 枚にも満たない、頼りないものであった。しかし、聞くところによると NGO が援助プロジェクトを立ち上げる際の情報というのは、この程度であるということである。今回のアフガン難民援助の情報を見てもわかる様に、事件が起こって NGO の活動はすぐに開始されるといっても過言ではない。これはその状況下において NGO の活動が急務であることにもよるが、NGO の場所取りつまり NGO 間でより目立ちかつ貢献度が高い活動にいち早く手をつけるという熾烈な争いが根底にはあるそうだ。従って、現実には悠長に現地視察、状況把握、立案といったことをしている余裕はなく、与えられたごくわずかな事実から現地事情を察しなければならないのだという。

しかし今回は私たちが初めての試みであったということもあり、情報内容は一国内における 2 つの民族対立という、コソボと同じような設定で、コソボについての研修前からのバックグラウンド研究、また 1 週間ほどではあったが現地滞在していた私たちにとっては状況の把握しやすい話題となっていた。

それでも私たちにとってこれは把握しきれない課題であった。つまり、紛争後の状況は想像できるにしても、実際その状況をどうすれば改善していけるかという対策を考えることは、全く異なるということだった。考えることは山ほどあった。まず、場所は、期間は、費用は、どのくらいの規模を対象とした何の援助かなど、私たちは条件や問題を探し出し、それに対する解決策を見つけ出さなければならなかった。その一つ一つの条件や規模が私たちの日常とあまりにもかけ離れたもので、数日のコソボ滞在ではごく一部の表面的なことしか触れることができず、援助の難しさを知った。つまり、場所ひとつをとってもそこがどんな気候なのか、どんな立地なのか、そこへのアクセスについてなど問題は様々挙がるものの、それがはたして本当に必要なのかということも分からず、手探りで計画を練っている状態であった。

また、このプロジェクトの最大の目標、ドナー獲得という課題あり、それは同時に、ドナーについての情報、そのドナーにとっての利益追求ということまで気を配らなければならず、援助と利益の結びつきの矛盾的な要素を痛感した。

政策を立てていく上で、私たちが一番頭を悩ませた問題は金銭的な問題であったように感じる。1つのアクションにかかる費用の相場がいったいどのくらいなのかという点に加え、数字があまりにも大きすぎて、私たちが普段想像しうる額の領域を越えてしまっていたということがあったからだ。その活動がもし個々にわたる援助である場合、個々を見ればたいした金額ではなくても、それが例えば援助対象人数が何千、何万という数であれば、また期間というなら、何カ月、何年という具合になれば巨額の予算が必要となる。私たちはそういう大きな未来の予想を想定し、細かく詳細を仮定し報告し納得させなければならなかったし、ドナー自身、一番の関心であり、多くの質問を投げかけられた。

いざ発表と言う時刻を迎えても、ほとんどの問題が未解決なままであった。といっても、いくら時間が与えられたとしても、この時この問題を解くことは到底できなかったであろうが。私たちにできる唯一のはっきりしていたことは、前回のワークショップで学んだ、「プレゼンテーションの発表の姿勢」だけであった。

発表は散々な結果に終わった。穴だらけの設定をいかに完璧なもののように言葉で装うか、それも勝負のうちであったであろう。しかし双方のプランは実際の NGO 担当者である、真由美さん、笙子さん、そして中村先生によって粉々に打ち砕かれた。土台から、細かな事までそれは彼女たちのものとは比べものにならないほど稚拙な内容であったであろう。覚えきれないほどの注文が出た。

講評として主にこんなことが挙げた。

- ① ひとつの活動に的を絞り、ほかの事は他の団体に任せること。
- ② 目的がはっきりしている点はきちんと明記すること。
- ③ KFOR は地元の治安の確保が任務であって、NGO 自体が当てにして利用できるものではないということ。
- ④ 食料に関しては WFP が主体であり、そこには栄養のバランスも含め規定があるということ。また食料援助にはドナーがつきにくいこと。

こうして見てみると私たちがプロジェクトを実践するという点では、いかに学ぶべきことが多いかということを実感させられた。『援助』という言葉を私たちは簡単に使うが、その背景にはたくさんの関係機関や各組織の思惑がある。

このワークショップの大きな目的とは、と今ここで私自身が思い返してみると、それは NGO 援助の限界を知るということであったように感じる。これは悲観的に思えるかもしれないけれども、実際 NGO にはたくさんの制約が伴い、現実的に考えたならばこの制限はいたって仕方ないことであり、民間の団体という枠組みの中での行動のある一部分に標準をあてそのことに専念するような行動をとるということが必要であると感じる。つまり、根本的な問題については国連や、個々の国が国際関係を踏まえてのアクションが主体となるものであり、NGO はそのサポートであるということを念頭におかなければならないということである。

今回一番印象に残ったことは世界がいかに自分たちを枠にはめて考えているか、ということであった。人種、国家、宗教、私たちはそういったたくさんの枠組みの中に属し、そうすることによってたくさんの仲間を得てきたこともわかっている。しかし、私は大学でこうした『枠』にとらわれない自分ということを学び、「平和」のためには『個々』が大切であると考えてきた。

そして今回のボランティアに臨んだわけであったが、私はこのことがいかに困難なことであるかを痛感させられた。それはコソボがセルビア人とアルバニア人といった枠にはめた対立であったということを目の当たりにしただけではなく、国家や NGO の援助、また国際政治経済すべてが枠にはまっていたということを痛感したことにある。私たちはコソボに「日本人」として迎え入れられ、活動を共にした。しかしそれは私たちが「日本人」であるからで、同じ事をしても、あるいはそれよりもっと彼らのためになることを行った人がいても、もしそれが「日本人」という立場でなかったならば、私たちと同じ基準で評価されていたかどうかは疑問である。そこにはこの「日本人」といった枠が必要不可欠であったのかもしれない。

同じことを考えている人はたくさんいるのにそれを同じとは認めない。反対に『枠』の中にいるからその人は自分にとって害を及ぼさない。そういった観念的なことがプラスにいたり、マイナスにいたりして人間を観る一種の偏見が構築される。

昔、彼らは宗教や民族を超えて共存していた。それを物語るかのように今はアルバニア居住者のみの場所の至る所にセルビア正教の教会があるのを見た。私たちは双方にいろいろな人々が住んでいることを理解している。平和な世界といわれる側に住んでいる私たちでさえ、たくさんの『枠』の中で存在している。そういった私たちが、平和のために人種や宗教の壁を越えた両民族の関係構築がいかに困難なことであるかをとても強く印象づけられた。



## Workshop 3

### - Negotiation -

国際学部 3年

伊丹 知子

この Workshop 3 では一日中（昼食中も）自分の役になりきって交渉をする、という今までやったことのないことを体験した。この Workshop 3 で、実際コソボにしながら、コソボが抱えている状況についてのケース・スタディすることによって、それぞれの立場やコソボについてより深く理解できる。私たちは、それぞれ与えられた自分の立場や主張を真剣に考えて、限られた時間内での交渉に臨んだ。

#### 1. 交渉の背景（一部フィクション）

国境近くの難民キャンプにいるセルビア人グループが、ラチャック近くの村への帰還を希望している。彼らは難民キャンプで、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）と共同で彼らの社会制度を作った KCO（the Kosovo Community Organization）を結成した。この帰還に強く反対したのが、1999 年のラチャック村虐殺事件後に結成され、ローカル NGO の KDA（the Kosovo Development Association）である。

KCO はコソボへの帰属意識が強いが、セルビア人帰還によって、セルビア人に対するテロ行為が起こるかもしれない。また KDA は、かつてセルビア人に村を攻撃されたことや、KCO のメンバーの一部が 1999 年に彼らの家や農家を燃やしたということを問題視している。

UNMIK（国連コソボ暫定統治ミッション）はコソボの民間人も交渉に参加させる必要性を感じ、公式に KDA を交渉に参加させることを決定した。これは少々危険な計画と思えるが、アルバニア系住民の中で高い地位にいる KDA が交渉に参加しなかったら、難民帰還のためのあらゆる合意が政治的抗議によって妨害される可能性があったからである。

一方、難民キャンプでは KCO のメンバーたちがコソボ帰還後の貧困と報復を恐れており、またかつての隣人たちのアルバニア人が、家を含めた自分たちの財産を占有しているのではないかと心配している。

UNMIK は、セルビア人帰還支援のための資金を提供してくれると思われる日本政府の代表に呼びかけ、また国際 NGO、ADRA 日本支部にも呼びかけた。

この Workshop 3 の目標は、交渉参加者全員の合意のもとにセルビア人難民の故郷までの安全な帰還を確実にすることである。

#### \* 交渉参加者 \*

- ・ KDA（Representatives of the Kosovo Development Association）
- ・ KCO（Representatives of the Kosovo Community Organization）
- ・ UNMIK（Officers of the Human Rights Department of UNMIK）
- ・ 日本政府（Officials from the Government of Japan）
- ・ UNHCR&KFOR（Officials of the Minority Protection Unit of UNHCR and KFOR）

- ・ ADARA JAPAN (Program Officers of ADRA Japan)

## 2. それぞれのボトム・ライン (崩すことのできない立場)

- ・ KDA : セルビア人とは一緒に住めない
- ・ KCO : 今すぐにコソボに帰りたい (新聞やメディアでアピール)
- ・ UNMIK : 中立、冷静に意見をまとめる
- ・ 日本政府 : すぐに資金は出せない、日本の支援が形として残るか
- ・ UNHCR & KFOR : 帰還推進派
- ・ ADARA JAPAN : 難民帰還は時期早尚

## 3. 交渉

午前中は 1 対 1 の交渉で、1 つの交渉はそれぞれ 15 分である。15 分たったらずやかに移動をして 5 分後には次の交渉を始めなければならない。

まず 1 対 1 の交渉では、それぞれが何を考えていてボトム・ラインはどこなのかを手際よく探りあう。そしてお互いの妥協点と共通点を見つけて、全体交渉で良い協力が得られるように基礎固めをする。

昼休みの 1 時間半も公式ではないが食事をしながらの交渉が続く。あらかじめ話し合いや意見を聞いてみたい相手とは、時間と場所を決めて交渉をする。また昼休みは、午前中に出された意見や集めた情報を整理する時間でもある。ただ話し合いを続けていても混乱してしまうばかりなので、頭を整理して、今後どんな話し合いや提案が必要なのかをよく考えなければいけない。交渉と頭の整理を両方しなければならないので、1 時間半はとても短く感じる。

午後は 3 チームごと (UNMIK と KDA と KCO の様に) にそれぞれ 45 分間の交渉が始まる。このころになると話も具体的になってきて、誰がどんなプロジェクトをどのくらいの費用で行うことができるか、などについて話し合った。そして最後の全員交渉でどんな話し合いをするべきかを話し合っておく必要がある。午前中と違って交渉の人数が増えるので、情報交換はしやすいが、誰かがリーダーシップを取らないと話し合いは難しくなってくる。

## 全体交渉

ここで初めて全員が集まって交渉が行われた。交渉時間は 1 時間である程度みんなが納得できる具体的な結論を導き出さなければならない。ここではまとめ役の UNMIK が司会でありである。最終交渉の結果、セルビア人難民帰還のために以下のことが話し合われた。

UNHCR は ADRA と協力しながら、インフォメーション・センターの設置をすることになり、インフォメーション・センターの内容について細かく話し合った。そこにはパソコン (5 台)、掲示板 (1 台)、テレビデオ (3 ~ 5 台) 設置し、その他建設費と維持費が必要ということになった。インフォメーション・センターについて、アルバニア側は「相手を知るきっかけになり賛成だ」と答え、セルビア側は「情報の流し方によってはお互いを監視しあうことにもなるが、活動を始めることには意味がある」と両方からの賛成を得ることができた。

また、ADRA は住宅補修と精神ケアのプロジェクトを計画していた。精神ケアはアルバニア、セルビア両方で歴史教育とトラウマ治療を中心に1年半～2年行い、予算の1億3千万を日本政府に申請していた。

KFOR&UNHCR はセルビア側の武器の取締りと両方の身元確認を半年で2千人分行うことになった。

#### 4. 報告

##### ★6カ月後に帰還

1. UNHCR が半年でセルビア人 100 人、アルバニア人 2000 人に対して身元の安全確認
2. UNHCR がインフォメーション・センターの設置
3. ADRA が精神ケアとアルバニア人側の意識調査を実施
4. ADRA が難民キャンプの生活状況の改善
5. KFOR がセルビア側の武器没収と、帰還時の国境の身体調査、帰還後の治安維持

#### 5. 結果

賛成 3 人

KDA 1 人：帰還の時期が延びたことと精神ケアに賛成。

KCO 1 人：最初、2 年間は帰還できないと言われていたが6ヶ月に縮められた。

ADRA 1 人：帰還を6カ月伸ばせた。

反対 7 人

日本政府 2 人：資金の使い道の詳細がはっきりせずお金は出せない。

KDA 1 人：帰還後にセルビア人の住宅がないことへの対応がなかった。

KCO 1 人：やはり早く帰りたい。

ADRA 1 人：6 カ月でプロジェクトを達成できるかどうか疑問。

KFOR：帰還後の治安維持がいつまで続くのかがはっきりしなかった。

UNHCR：6 カ月で身元確認が終了しなかったらどうするのか。インフォメーション・センターの計画も不完全。

#### 6. WORK SHOP3 で何を学んだか

★相手のボトム・ラインをしっかりと把握して話をすすめていくこと！

★交渉では相手の立場を考えて、駆け引きと妥協が必要である！

実際に交渉をしてみて、大勢での交渉と時間内で話をまとめることの難しさがわかった。また、役を演じることによって普段は分からない人々の立場や主張を考えることができた。例えば、世界がアルバニア人に同情する中でマイノリティのセルビア人が国際社会には見捨てられて、劣悪な生活環境での生活を強いられているということ。KFOR の仕事は辛くてストレスの多いものだということ、などである。この2つの民族の問題に様々な国際社会の問題が関わっていることにも気づいた。

全体交渉でみんなが黙ってしまったので、十分な話し合いができなかった。この時 UNMIK



は、何を報告に盛り込むかを考えながら話し合わなければいけなかった。

## 7. 感想

私は UNMIK の代表役で交渉をしていて、最初は全員の意見をまとめてよい結果を導き出そうとわくわくしていた。しかし、だんだん交渉が進むにつれて、それぞれの意見も微妙に変化してくる上に、自分が参加していない交渉ではどんなことが話し合われているのかがとても気になりだした。そして、全員交渉のときにはまとめ役として話を進めていかなければならなかったのに、それまでの情報の多さに混乱してしまって、それ以上の意見を聞き入れることが困難になってきていた。今、記録のノートを見ても、だんだんノートが雑になり、新たに加えられる情報量も少なくなっているのがよくわかる。そんな状態でも時間は限られており、みんなが納得できる結論をださなければいけないので慌てる一方であった。結果的には交渉決裂になってしまったので、とても残念で悔しかった。その一方で、反対した人がその理由を堂々と答えていたことに感心させられた。

この Workshop 3 は、私たちのコソボでの最終プログラムだった。2 週間の活動を終えてコソボの様々な現状を目の当たりにした後であり、事前に与えられたわずかな知識だけでこのハードで内容の濃い Workshop3 ができたのだと思う。最初の頃だったら自分の意見もしつかりと言えず、あまりいい話し合いはできなかっただろう。

今回のケースのセルビア人難民帰還だけでも、それぞれの立場のぶつかりあいや意見の違いで交渉が困難だったのだから、コソボに残っている様々な問題を解決していくのはもっと大変なことだと思う。しかし、現在日本ではコソボの問題はあまり大きな話題になることはなく、人々には数年前に戦争をしていた危険な場所というイメージが残っているだけである。だからこそ、プロジェクトに参加して Workshop3 で頭を悩ませて考えた 1 人として、コソボの現状と今回の経験を忘れないためにも、コソボのことを多くの人に知らせていきたいと思う。

# ラチャック村訪問

## —ラチャックが教えてくれたこと—

国際学部 4 年

松葉 温子

### はじめに

8 月 30 日夕刻、私達はラチャック村に到着した。ラチャック村はコソボ紛争のキーワードとなる地であり、1999 年 1 月にセルビア軍によるアルバニア系住民の大虐殺が起こった村だ。この事件が元で国際社会も重大決意をし、コソボ紛争解決に向けて走り出したのである。この村に向かう道中、参加者それぞれの胸にはどんな思いがあったであろうか。コソボに入って 3 日目、実際に足を踏み入れ、現地の人の話を聴く最初の日でもあったラチャック村訪問は、大きな覚悟を必要とし、緊張と戸惑いを抱えてのものとなった。

### ラチャック村の現在と過去（校長先生のお話）

ボランティアバスの到着に伴って、どこからともなく集まってくる子供達の数に私達は圧倒された。子沢山の風習に、大人たちが多く殺されたことも加わってか、この村には子供ばかり大勢いるという印象を受けた。彼らに歓迎されながら、まず私達は丘の上に移動し、この村の小学校で校長先生をなさっているスケンダー・バイローミ先生にお会いして、その地で起こった出来事について伺った。

ラチャック村は合計 3 回、セルビア軍によって攻撃されたという。村を取り巻くならかな山々の上にセルビアの軍隊が現れ、そこから攻め込まれて、村の家の約 60% が焼かれ、壊され、100 世帯が完全に家を失い、60 人の子供が親を失ったそうだ。ラチャック大虐殺では山の細道に追い込まれ、老若男女合わせて 42 人が殺され、他の事件の犠牲者も加えると、それらの攻撃の犠牲となった人々の数は、合計 45 人にのぼるという。過激派の KLA（コソボ解放軍）が潜んでいるという理由でこの村は攻撃を受けたが、実際にそのような事実はなく、大きな傷だけが残されることとなった。

家族や親戚、隣人が殺されるという残虐行為が目の前で起こり、トラウマを抱えている子供も多いという。そういう子供達に対して、学校ではトラウマケア・プログラムを行っているそうだ。小学校の生徒数は 400 人で、40 人が一クラスになっている。現在コソボでは、カナダから援助を受け、先生の再教育が行われている。

校長先生は、コソボの将来について、独立の願いを持っている。独立して、EU の一員になり、それらの国々のように発展したいと考えていると、先生はその夢を再確認するように語ってくれた。

紛争前の村の様子を尋ねると、ラチャック村ではセルビア人の家族が 3 家族住んでいたことを話してくれた。そのうちの 2 家族は紛争前に引越し、残りの 1 家族は、紛争後に出て行ったそうだ。ただ、一緒にいて特に問題を起こしてのことではなかったということだ。

## 集団墓地

先生のお話のあと、私達は集団墓地へ向かった。ムスリム独特の造花で飾られた土盛状のお墓が、42体分並んでいた。そのうちの一つは穴だけが掘られており、それは、大虐殺時にその被害者の遺体が消えてしまい、それが今も発見されていないことを表していた。確かに殺されたところは目撃されているのに、遺体はどこからも出てこず、そのことについても人々は悲しみを負っている。

墓碑にはどれも 1999 年でなくなったことを示す年号がプラスチックのプレートで書かれていた。私は、そこに眠っている人に、少しでも思いを馳せたいと思い、殺されたときにその人が何歳だったのかを一つ一つ数えて回った。90代が1人、70代が1人、60代が7人、50代が7人、40代が6人、30代が8人、20代が10人、そして10代が4人と行方不明1人の計42人がそこに眠っていた。衝撃を受けたのは、1980－1999という年号を見たときだ。私と同じ年生まれの彼か彼女かは、19歳という若さで虐殺の被害者となった。違いすぎる人生に、私は混乱し、そのときにはもう平常心を保つことはできなくなっていた。そして、目の前に広がる墓地とその中の子供達という現実の光景を、冷静に受け止めるということは、私にとって不可能に近かった。

話を聞いている間も、集団墓地にいる間も、子供達はずっと私達と共にいた。どんな気持ちでこの話を聞いているのだろうと、どんな気持ちでこのお墓にいるのだろうと思ったら、いたたまれない思いでいっぱいになった。子供の頃、私は戦争で両親が死んでしまう、とても恐ろしい夢を見たことがある。怖くて起きだすと、隣でちゃんと両親は寝ていて、わたしは夢でよかったと胸をなでおろし、両親の布団にもぐりこんでまた眠ったのだった。しかしその怖い夢は、彼らにとっては実際に起こったことであり、それがどんなにつらく悲しいか、想像してもしきれないだろう。思わず泣き出してしまった私に、ローカルスタッフのメリータさんが、「強くなりなさい。あなたが強くなかったら、ここに来てできることは何にもない」と励ましの言葉をかけてくれた。彼女自身も紛争を体験した身であり、同じ民族の村で起こった虐殺の話を通訳するという仕事を引き受けながら、彼女は私を励ましてくれたのだ。元気を出さないわけにはいかない。

## 犠牲者の遺体安置所となったモスク

その後、ラチャック大虐殺の時に遺体が安置されたモスクに向かった。そこに遺体は認知のために4日間保管され、そのあと、検死のためにセルビア警察によってプリスティナの病院に運ばれたそうだ。犠牲者の遺体は、約3週間ものあいだ、ラチャック村に返却されず、遺体の帰りを待つ間は本当に苦しかったという。セルビア軍に家族を多く殺されてしまったという女性も、私達に話をしようとして来てくださっていたが、話すことはやはりまだ難しいとのことで、お話を伺うことはできなかった。しかし、紛争が終わっても人々の心に残された傷は大きいということを、私達は知ることになった。

## 千羽鶴にたくす絆

その後、私達は小学校へ移動し、日本から持っていったお土産のプレゼンテーションを行



った。私達はポスターとダンボールにいっぱいのノート、そして千羽鶴をプレゼントし、それらが日本にいる多くの人の協力によって用意されたことを伝えた。平和の願いが込められている千羽鶴については特に喜んでくれ、1つ折って見せると感激した様子で、私達はお礼の言葉と共に素晴らしい笑顔を頂いた。現在、新しい小学校が建設途中であるが、そちらが完成し移動するときにも、鶴も必ず持って行って大事にすると約束してくださった。その千羽鶴が彼らと私達の絆になり、私達が彼らを忘れないでいることが、彼らの励みになったらいいと強く思った。

### ラチャック村に響く笑い声

プレゼンテーションの後、私は校長先生と少し話す時間を持つことが出来た。私は、子供達のことをとても気がかりであり、ラチャック村に到着してから、彼らの笑顔を正面から素直に受け取ることが出来ずにいたのだ。その笑顔の裏には、どれほどの傷を抱えているのだろうと考えたら、私達にむけられる彼らの笑顔が、悲しくみえて仕方なかった。私は、校長先生にそのことを伝え、彼らを励ましつづけてほしいと恐縮ながら申し上げた。すると校長先生は、「親を亡くした子供達にとって、学校という場は第二の家庭になるところである。彼らと共に、傷を乗り越えていきたい」と返事を下さった。抱えた傷とともに、憎しみを語り継いでいくのではなく、明日を見て生きていこうとする、強さとたくましさがそこにあった。私は心の底から感動し、体が震えるほど喜びを感じた。そして、子供達の笑顔が本物であると知り、彼らの笑顔を素直にまっすぐ見られるようになった。ボランティアバスが出発するまで、私達は写真撮影やおしゃべりを子供達と楽しむことが出来たが、私ははじめて彼らと笑い合えた。今でもそのときの笑い声が聞こえてきそうな気がする。ほんの数分だったが、素晴らしいひと時であった。

### 終わりに

ラチャックで起こったような虐殺は、KLA に関係していると疑われたアルバニア系のどの村でも起こった出来事であり、何も特別なことではないという。ブシトリという村では、78人が虐殺されたともいう。ラチャック村大虐殺は、国際社会が動き出すきっかけになった事件ではあるが、それが際立ってひどかったというわけではないという事実、私は大きな衝撃を受けた。特に、潜在的戦闘要員と見なされた15歳から60歳の人々の多くは、連れ去られ、そして虐殺されたという。集団墓地で、私の弟の年齢（17歳）で殺された少年がいることを知ったが、もしそれが本当に私の弟だったらと考えると恐ろしくなる。私は憎しみと悲しみに支配され、二度と笑うことなどなくなっていたかもしれない。ラチャックという地に自分の足で下り立ったことで、私は彼らの痛みを身にしみて感じたように思う。そして、ひどい仕打ちに遭いながらも、手を取り合って笑顔を取り戻すという、人間の強さも知ることが出来た。彼らは、私達を歓迎してくれ、つらい話を聞かせてくれた。その経験を受け、今私達に出来ることは、彼らのことを少しでも多くの人に伝え、彼らには友人が大勢いることを伝えることだ。遠い国で、自分たちのことを思ってくれる人がいるということが、何より

も彼らの励みになる。紛争がコソボに残したものは、深い傷以外の何ものでもない。しかし、千羽鶴が残したような人と人とのつながりが、彼らを支え、憎しみの鎖を断ち切る力になったらと、強く願ってやまない。

## Be strong

### —コソボショックを乗り越えて—

コソボの現実を目の前にして、わけもわからず溢れてくる涙を私はなかなか止めることが出来なかった。悔し涙でも失恋の涙でも感動の涙でもない、とにかくそれははじめて流す涙だった。私は小さすぎて、コソボが抱える問題はおろか、自分がその地にいるということすら、うまく飲み込むことが出来なかったのだ。ただひたすら、とんでもないところにきてしまったと心の中で繰り返していた。それと同時に、自分の知っていた世界の枠がガラガラと崩壊していく音を聞いた。

同じまるい地球の上で、見過ごせない物事に山ほど出会い、これほどまでに衝撃を受けて帰ってくるとはとても想像していなかった。その衝撃を完全に飲み込み、過去の体験として私の中に体系付けることはまだ難しい。コソボで手に取るように感じた、人間の心の中にある憎しみや悲しみはいつまでも色あせないからだ。しかしそれだけではない。まだまだ未熟なほんのちっぽけな私がコソボに赴き、成し遂げたことがあるという事実、残してきた繋がり、そしてこの胸に得た情熱は、それよりも増して冷めることはない。

「何でコソボになんか行かなくちゃならないんだ。」このプログラムに参加したいと両親に話したとき、電話口で父がそういった。今まで、やりたいようにやりなさいと私を伸ばしてくれていた父が、否定的なことを言ったのは初めてだった。それでも、「温子が選んですることだから、万が一のことがあってもあきらめなきゃいけないね」と両親は話し合い、覚悟を決めたのだと後で聞いた。親にとって、自分の娘が危険地帯とされる場所に行くということは、「かわいい子には旅をさせろ」という諺の次元を超えていたのだろう。しかし、今の私を見て欲しい。時には弱々しくみえることもあるだろうが、その内側には、使命感に燃えた夢と強固な信念が生まれてきている。

コソボで過ごす日々の中で、とてつもなく打ちのめされていたとき、私を救ってくれたものは、スタッフの声であり、仲間の存在であり、そして自然の偉大さだった。まだあまり赤みを帯びていない夕日の隣に小さな小さな虹を見たり、停電した家の屋根の上に瞬く、満天の星空を見た。人間とは、本当はすごく小さなことでも幸せになれるし、元気を出すことが出来るのだ。この世界には、息苦しくなるくらいたくさんの矛盾が渦巻いている。しかし私は胸を張って、この矛盾した世界を認めないで生きていこうと思う。

最後に、このプログラム実現に関わったすべての人達とすべての仲間たちに、大きな声で御礼を言いたい。何事にも代え難い経験を本当に有難うございました！

## ミトロビツァとノンダブルカ小学校

国際学部 2 年

友田幹久

コソボの州都プリスティナの北、約 35 キロに位置するミトロビツァはコソボ内の他の地域とは全く空気を異にする独特の町だ。しかし、「これぞ紛争地帯」とも言うべき地域と言えるだろう。

コソボは大きく分けて、5つの地域に分かれており、NATO 軍を中心とする KFOR (Kosovo Force コソボ国際平和維持部隊) も 5つの地域に分けて治安を維持している。ここ、ミトロビツァはフランス部隊の管理下にある。この町は、中央に流れるイバル川をはさんで、南にアルバニア系住民居住区、北にセルビア人居住区と分かれている。コソボ紛争以前は両民族が混在する町だったが、紛争により北のセルビア人居住区と南のアルバニア系住民居住区の二つに分離されてしまった。

現在は、イバル川に架かる橋とその兩岸の地区をフランス部隊が厳重警戒態勢で監視している。橋には、頑丈そうなバリケードが張り巡らされ、それを有刺鉄線でぐるぐる巻きにしてある。そして、橋の両側には、検問所があり、通過するには逐一身分証明書 (ID) を提示しなければならない。スピードを出して通過することができないようにするために橋の袂および橋の上には幾台もの戦車や装甲車、軍事車両がジグザグに止まっているだけでなく、段差がいたるところにつくられている。また、戦車は銃口を水平に保ち常に臨戦態勢にあることを示している。

ここまで厳重に警戒態勢がとられるようになった背景には、2000 年 2 月 3 日に発生した「ミトロビツァの騒乱」がある。この騒動は、紛争が終了し、KFOR による治安維持体制確立後の事件であったため、コソボ住民だけでなくコソボ内の軍隊、国際機関にも大きな衝撃を与えた。これは、2000 年 2 月 3 日の夜、北に住むセルビア人たちが川のすぐ北にあったアルバニア系住民居住区の高層アパートに侵入、アルバニア系住民の部屋に手榴弾を投げ込んだり、銃を乱射したりして襲撃、多くのアルバニア系住民の死傷者を出したという事件だ。フランス部隊が監視していたにもかかわらず、このような事件が発生してしまったことから、フランス部隊に対する批判が巻き起こったこともあり、フランス部隊はそれ以降、警戒態勢を更に強めての監視活動となった。

この同じ町に存在する 2つの異なる民族の居住区には全く異質の空気が漂っている。南のアルバニア系住民居住区では今は、街を走る車の量も人通りも多く、商店やキオスクもいたるところで目に付き、買い物をする人も大勢いる。活気に満ち溢れた街と感じられる。一方、北側のセルビア人居住区は、人通りはほとんどなく、キオスクは午後 3 時には店じまいし、街の中にある CD ショップなどの商店にもほとんど人がいない。本当に人が住んでいるのか、という雰囲気活気がない。むしろどこからともなく漂ってくるピリピリと張り詰めた冷たくて重い殺気だった空気さえ肌に感じる。道路のいたるところに装甲車や軍事車両、国連車両が止まっているのが目に付く。イバル川ほとりの露店の前には、アルバニア系住民を監

視し、橋を渡ってきた者がいたら、すぐさま無線や携帯電話で仲間を集める「ブリッジ・ウルフ」と呼ばれるセルビア人の監視役が24時間体制で張り込んでいる。

紛争以前は、ミトロビツァという1つの大きな町に同居していたのが、紛争中にセルビア人たちはアルバニア系住民をミトロビツァから追い出した。紛争が終わると、一斉に戻ってきたアルバニア系住民が今度はセルビア人たちを南から北へ追いやった。そこでできた両者間の隔たりは、2000年2月3日の「ミトロビツァの騒乱」で更に深刻なものとなり、修復が困難なものとなっている。

しかし、その根深い傷跡を癒し、お互いの関係修復のために日夜努力する1人のアルバニア系の小学校の校長と、校長の指導に従う複数の先生たちの姿が、南の町にあった。

迫害され、相手よりも深い傷を負ったに違いないアルバニア系住民の間にはやはり、「セルビア人との共存は難しい」という意見が根強い中、このアレフ・ラティフ校長のノンダブルカ小学校では、セルビア人と和平を成功させ、紛争以前のように共存しあいたいという願いから、手探りで和平への道を探している。この校長や他の先生には1つの大きな願いがある。それは、彼らは現在、南側にあるテクニカルスクールを間借りして、1日3交替制で授業を行っているが、いつの日か、紛争以前までセルビア人の先生や生徒と共に使ってきた、北側の地にある元の学校に再び戻り、教鞭をとりたいというものだ。

しかし、彼らの願いはそう簡単に実を結ぶものではない。生徒の中にも、職員の中にも、家族や親戚、友人をセルビア人によって殺された人は大勢いる。そのような人々の心には深い傷がいまだに癒えないでいる。私たちがこのノンダブルカ小学校で出会った女生徒エミネちゃん（14歳）は「ミトロビツァの騒乱」のときに、部屋に手榴弾が投げ込まれ、母親を目の前で亡くしたというつらい過去を持っている。また、別な女生徒アシェちゃん（14歳）は紛争後、紛争のトラウマで苦しんでいる。トラウマで苦しんでいる子どもは多くいるが、このエミネちゃんは、美術の授業で、「紛争以前の絵」と「紛争当時の絵」と「現在の絵」と「未来の絵」を描かせたところ、彼女だけは「未来の絵」を描くことができなかった。

このようなトラウマを抱えた子どもたちの精神ケアのために、コソボでは、「ペタゴグ」という生徒指導・相談役の制度がある。しかし、このノンダブルカ小学校では人件費削減のためにこれを中止せざるを得なくなり、今では校長自らが生徒たちの相談役となっている。

子供たちに笑顔を取り戻させるために、もう1つの取り組みがある。それは、コソボで活動するNGO（非政府組織）ADRA Japanの働きかけで、2001年度の4月から茨城県にある北浦三育（きたうらさんいく）中学校の生徒とノンダブルカ小学校の生徒の間で毎日2時間のインターネットでの交流やビデオレター、プレゼントの交換をするという活動だ。また、今回私たちがここを訪れた際、北浦三育中学校の生徒が描いた絵画や生徒たちが折った千羽鶴、それと茅ヶ崎市の小出小学校の生徒が描いた絵画、そして私たち、今回のボランティア・メンバーで折った千羽鶴と日本のポスターや、日本で行った募金活動や寄付で集まったお金で購入した全生徒分のクレヨンを手渡した。

ラティフ校長の熱心な働きかけやADRA Japanの活躍もあって、以前は和平のために自ら歩もうとしていなかった生徒の父母や他の先生方、地元の人々が、最近では少しずつではあるが、自分達からセルビア人の方へ歩み寄り、問題を解決していこうという動きが見られ



るようになった。

それと何よりも嬉しかったことが、以前美術の授業で「未来の絵」を描けなかったエミネちゃんが最近、「未来の絵」で“太陽”を描いたというのだ。これは、ミトロビツァの将来への一筋の明るい光のように思われる。

ミトロビツァという、他のコソボ内の地域とは異なる特徴を持ち、最も緊迫した地域で、この様な和解へ向けた取り組みが成功すれば、コソボ内のアルバニア系住民とセルビア人の間の対立は緩和される方向に向かうのではなかろうか。私は、ここミトロビツァで時間をかけながらも、しっかりとした関係修復が達せられる日がくることを影ながら願わずにはいられない。

## 日本での活動と共同生活

国際学部 3 年

河 明子

### 日本での活動

6 月の終わりからコソボ・ボランティアの準備に取りかかりました。まず始めにコソボの子供たちを励ます目的も込めて、子供たちの絵の交換による交流を計画し、国際交流にも熱心だという評判の大学近くの小出小学校に頼みに行きました。もう 7 月に入る頃だったので早くしないと小学校は夏休みに入ってしまいます。しかし突然だったのと、こちらの用意が不十分だったために、その時すぐに同意してもらうことが出来ませんでした。再度、私達がコソボに行く主旨と目的、コソボの状況、参加するメンバーの名前を文章にして小出小学校に正式にお願いに行きました。久米健夫校長先生は快く受け入れてくれました。作品を作るのに時間がないのと、この時期学校側は忙しいということで、今までに描いた絵の中からか、ホームワークで描いてきてもらうという事になりました。全部で 38 人の生徒の作品を頂きました。

そしてこれと並行して、大学内においての募金活動と、文房具を寄付してもらうキャンペーンの準備に取りかかりました。学内に貼るポスター 50 枚と寄付 BOX をたくさん作りました。前期テストが始まる前の一週間、昼休みを使って、募金活動を行いました。同時に先生方の研究室をまわり、ゼミの時間を使って学生に話してもらうための協力もお願いしました。学生のほかに多くの先生方が募金してくれて、一週間で集まった総額は 55,540 円にも上りました。

夏休み前にはよく研究室に集まり、今後の打ち合わせなどを行いました。夏休みには、英語力強化のために 1 週間学校に来て、中村先生からニューヨーク・タイムズなどを使って英語とコソボ事情の特訓を受けました。そして夏休み中は 1 週間に 1 回ほどミーティングを行い、アドラ・ジャパンの橋本さんにも来ていただいて、より具体化していきました。ここでは主にグループ分けや、持ち物の分担、募金の使い道、コソボの学校に送るプレゼントなどを話し合い、時間を作って出し物の練習、千羽鶴の作成など行いました。

### \*募金の使い道について\*

私達は始め文房具を買うために募金活動を行いました。募金は 5 万円以上にもなったのは上に述べたとおりです。何をどれだけ買えばいいだろう。集めた文房具を数えながらみんなで話し合いました。それから、お土産の話があってみんなで話し合った結果、集まったお金はお土産（日本の絵・こいのぼり・世界地図）を買う資金に充てることになりました。しかしこのことについて中村先生から厳しく指摘されました。そもそも私達の募金活動の趣旨は「コソボに鉛筆や消しゴムなどの文房具を届ける」ということでした。掲示したポスターにもはっきりそう書きました。だから学内で集めたお金をこの目的以外で使う事は許されないということです。またこのお金を使わないで済ませる事も出来ません。私達はもう一度よく考え直しました。募金で集まったお金が大金になったために、募金を始めた時の「鉛筆一本

分でも」という気持ちを見失っていました。集めた募金をたとえ善意からでも、私達の都合で勝手に用途を変えていいものではありません。私達の意見はその後、文房具を買うことに一致しました。

私達は何を、どのくらい、どこの学校に贈るかという話し合いをしました。最初は「すべての子供達に消しゴムを」や、「9校すべての学校に文具を」という話し合いをしていたが、これを実現するにはこの予算の中では不可能ということになり、特に交流が行われるマリシェボ高校やいまだにアルバニア系住民とセルビア系住民が川を挟んで対立が続くミトロビツアのノンダブルカ小学校の2校に絞って文房具を贈る事にしました。

文房具のほかに私達はお土産を用意しました。千羽鶴3つとこいのぼり4セット、日本人形1つです。千羽鶴はみんなで手分けして折り、こいのぼりと人形に関しては家にあったものを持ち寄り、また各自知人に声をかけて譲っていただきました。

### コソボでの共同生活

現地ではボランティア12名（アドラのインターン大学生、日本大学生各1人を含む）を2つのグループに分け、各グループのリーダー、サブリーダー、記録、生活コーディネーター、会計の担当を決めました。

コソボでのアドラハウスは快適でした。まだ比較的新しい建物だったので、清潔で広くて、想像とは違いました。私達にはもったいないくらいの家でした。部屋はとても広く何の問題もなかったけれど、人数が多いためにトイレとシャワー、特にトイレはよく取り合いになりました。またいつでも電気と水があるわけではないので、みんなの事を考えなければなりません。シャワーを浴びていたら停電になったり、頭を洗っている最中に水が出なくなったり、電気コンロでご飯を炊いているときに停電になったり。そんな時どこからともなく「懐中電灯ー！！」と大きな叫び声が飛んできました。

昼食や夕飯が自炊の時は3人の当番交代制です。雑炊やチャーハン、焼きうどん、ビーフシチュー、お好み焼き、すいとんなどバラエティー豊かな飽きる事のない食事になりました。

遅寝早起き。これは基本でした。スケジュールが詰まりすぎていて、夜は毎日時間に追われていました。ミーティングやレポートの発表、千羽鶴の作成、ワークショップの勉強などやる事が多くて寝る時間を割いての作業でした。慣れない生活と気候、疲れ、寝不足、ストレスがたまり、体調を崩した人が3、4人出ました。38度以上まで熱を出した人も数人いました。

プログラムがすべて終了した最後の日、とても冷え込む中、前庭でバーベキューもしました。あまりにも寒かったため、音楽をガンガンかけて踊りださずにはいられないほどでした。

最後の反省会では、みんながそれぞれ溜まった思いを十分に話し合う機会がなかったことが問題とされました。もっと夜の使い方を工夫してみんなで考え、語り合える場を持つべきだったでしょう。でも多数の共同生活で毎日かなりの精神的ストレスを受けていたので、発散するためにはたわいもない話をする事がとても大切だったという意見もありました。

## 会計報告

募金：学生	13,544 円	内訳：消しゴム	1800 個
先生方	42,000 円	クレヨン（1 箱 12 色）	200 個
計	55,544 円	鉛筆（3 本×5 セット）	15 本
		計	55,544 円

## コソボボランティアを終えて

期待と不安の中、ついにコソボに降り立った。空港から市内に向かっていく途中、私達はここが紛争地であるってことをすぐに思い知らされた。屋根がない家、焼けて真っ黒になった家、崩れた家の残骸、そして戦車。車の窓にへばりついた。すごく興奮した。

着いて2日目にして電気が消えた。水も止まった。内心、どんな生活が始まるのかワクワクした。この日、生まれて初めて真っ暗闇の中、ロウソクの光の下、シャワーを浴びた。シャワーといっても貯めて置いたバケツの中の冷たい真水。ワクワクなんかしていられないと思った。

精神的にも肉体的にも本当に疲れ果てたのが3つのワークショップだった。Ⅰでは、コソボは独立すべきか、否かについてディベートした。Ⅱでは初めて **Proposal** を書いた。Ⅲではみんながそれぞれの立場にたってシミュレーションをした。この3つのワークショップを通じて、私はよりコソボのことを考える事ができた。本当の悲しみと、憎しみ、深い傷を負ったアルバニア人やセルビア人、そして彼らを支える国際社会の気持ちなどは、遠くから見ているだけでは何にも分からないし、考えられなかった。

コソボの子供達はとびっきりの笑顔で私達を迎えてくれた。それがすごく嬉しかった。子供達はどこにつらさを抱えているのか分からないほど明るい。でも自分の目の前で母親を殺された子もいて強いショックを受けた。もし自分だったらって考えたけど、怖くて想像できなかった。だけどそれでもこの子供達はこれから、共存という社会へ壁を乗り越えなければならない。

コソボは山に囲まれてすごく景色がきれいでのどか。紛争地だったってことを忘れそうになる。だけどよく見ると屋根のない家や崩れかけた家が目立ち、幹線道路では軍の戦車、装甲車、ジープが列をなして走る。山には地雷が埋まっている。すごくギャップを感じた。

別れの時にアルバニア人の高校生に「コソボに来てくれてありがとう」って言われ抱きしめられた時、ほんとに来て良かったと思った。

日本にいたら絶対に起こりえない事、思いつかない事、考えられない事を様々な活動を通して、知ることができた。ここで感じたこと、おもったこと、考えたことを本当に忘れたくない。コソボに連れて行ってくれた中村先生、笙子さん、真由美さんを始めアドラ・スタッフの方々、そして現地では UNHCR 職員の根本さん、白井さんなどいろんな人に出会えて、貴重なお話を聞けたことに感謝しています。



## 文教大学ボランティアをコソボに迎えて

ADRA Japan 海外事業担当  
コソボ駐在代表 渡部 真由美

20 世紀最後の民族紛争として世界の耳目を集めた紛争終結からすでに 2 年を経たコソボ。近隣諸国も含め民族間の緊張が今なお続くバルカン半島のコソボに不安と期待に胸膨らませて乗り込んだ文教大学の学生達が、2 週間のボランティア・プログラムを終えてプリスティナ空港から飛び立ったのを見送ったあの時を、今もありありと思い出す日々が続いています。

ADRA Japan は 1999 年 7 月初めに紛争後間もないコソボに入りました。以来数々の緊急復興プロジェクトを進め、現在でも復興後の開発プロジェクトを企画・実行しています。日本から ADRA Japan のコソボ事業に派遣されたボランティアの数は、この 2 年間で、国連ボランティアと呼ばれる国連採用分も含めて 40 人を超えました。復興援助の現場を経験する機会を若者たちに与えることも、ADRA Japan のコソボ活動の中で重要な位置を占めてきました。

しかしながら、今年 2 月に火を噴いた隣国マケドニアでの民族紛争の影響を思うと、昨年の「コソボ環境教育ボランティア・プログラム」に続いて、果たして今年もボランティアを受け入れていいものかどうか。大変重い課題を背負って逡巡したのは紛れもない事実です。

ところが、文教大学の中村恭一先生から「今年もぜひボランティア・プログラムを実行して欲しい」と提案され、先生の「これからの国際貢献を志す若者」への大きな期待と情熱を知ったとき、その思いに心から賛同して、ぜひ今年も実行したいと私なりに決意したのでした。コソボで国連広報室長として勤務中の先生は、昨年夏のボランティア活動を間近に見て、その意義をだれよりも高く評価してくれていました。幸い、今回もぜひボランティア・プログラムの実現に協力したいという ADRA Japan の方々を含む支持も得ることが出来て、ついに 2001 年 8 月 28 日 10 人の文教大学の学生をコソボに迎えることとなったのでした。

文教大ボランティアを迎えるにあたり、今年 5 月より現地で企画し始め、2 週間という短い滞在期間をいかに内容的に充実したプログラムにするかを考え続けましたが、私は一つの問いかけを軸に調整にあたりました。それは、「心と体のバランスを考えたプログラムは出来ないか」というものでした。

昨年のボランティア・プログラムは肉体的に大変きついものでしたが、今回も体力的限界に挑戦する“労働”も必要だと考えて、ADRA がコソボで行っている学校再建プロジェクトにおいて、地元学生たちと共同で一つの目的を達成する活動を考えました。それは再建された高校の校内美化活動でした。詳しくは学生の皆さんが報告してくれるでしょう。

しかしながら、そこで得られる達成感以外にも、コソボという紛争地でしか企画できない活動はないか、またボランティア精神という原点に立った活動とは何かという思いから、グループワークを基調としたワークショップを 3 回に分けて行うことを考えました。これは

ADRA Japan としては初めての試みでしたが、このワークショップによって、コソボ、ひいては紛争という世界的現象に対してボランティア個人が自分の意見を構築すること、また自ら決断する実験を通して「自分の責任において考える」というスタンスを訓練することなどを狙いとして、決して「受身」ではない、より高度な参加型プログラムを企画することにしたのです。

短期間だけに、休む間もない過密スケジュールとなりましたが、正直言えば「果たしてついてこられるか」という不安を私としては常に抱えていましたが、学生たちの情熱とバイタリティーはそんな私の不安を吹き飛ばし、真剣勝負の日々が続きました。もっとも平和な日本では決して触れることのない民族紛争を通して見る「世界の現実」に直面して、自己の中で消化不良を起こしてしまっている学生がいたのも当然でしょう。

しかし各地で住民たちと様々な形で交流し、別れの時にはお互い涙を流して肩を抱き合う姿を何度も見かけることになりました。こうして迎えた最後の日、プリスティナ空港で見た文教大生たちは、2週間前とは違った精悍な顔つきとなり、それは満足感と達成感に満ち溢れていました。そのときの一人一人の姿、顔立ちはとっても印象的だっただけでなく、私自身もこのプログラムから、そして学生達から多くのことを学ばせてもらったことに気づかされました。

「援助」とはなにか、そして「国際貢献」とはなにか。これから国際協力の分野を志す人々は、やはり机の上での勉強だけではなく、なるべく早い段階で「現場」を経験することがいかに貴重なことかを忘れて欲しくありません。限られた環境の中で最大限の力を出し切ることの大切さを知ったであろう今回参加した学生の皆さんに対し、中村先生のご尽力で実現したこのプログラムの「その後」に大いに期待したいと思います。

最後になりましたが、今プロジェクトの実現のために多大なるご理解・ご支援をくださいました文教大学関係者の皆様、また期間中常に行動を共にして学生達にコソボやバルカン、さらには国連活動に関する知識の伝授や適切な助言をしてくださった中村先生に心より感謝申し上げます。そして苦しい状況の中でも精一杯の力を出し切った学生の皆さんのこれからに大きなエールを送ります。

製作 文教大学コソボ・ボランティアーズ  
発行 文教大学国際学部中村恭一研究室  
神奈川県茅ヶ崎市行谷 1100  
電話 (0467) 53—2111  
E-MAIL : [kykyo@shonan.bunkyo.ac.jp](mailto:kykyo@shonan.bunkyo.ac.jp)  
協力 文教大学国際学部  
ADRA J a p a n  
印刷 関水印刷所  
神奈川県藤沢市長後 1027



KOSOVO REGION



KOSOVA



UNMIK  
BORDER POLICE

D 11-09-2001

PRN AIRPORT

ALBANIA

THE FORMER  
YUGOSLAV REPUBLIC OF  
MACEDONIA